# Ⅰ．経　緯

## 1．調査に至る経緯

大井町は，首都圏30km圏内の県西南部に位置し，畑作を中心とする純農村地帯であったが，昭和40年代のいわゆる地域開発ブームの渦中に，本町もさらされ，武蔵野の雑木林が研究所に，畑地が宅地へと化し，スプロール化も進んでいった。町内のそこかしこに建て売り住宅のラッシュが見られるようになった。むろん，その結果として，人口と世帯数は昭和40年前後から急激に増加し，40年から50年の間に人口約22,000人，世帯数約6,600戸が増加した。（表2参照）

当然，開発の波は埋蔵文化財に及び，保護対策が叫ばれるようになった。農地転用状況も，昭和30年代後半は工場誘致政策を中心とした大規模転用が目立ったが，40年代になると宅地建設による転用が増え，50年代には転用の主力は住宅になり，小規模かつ蚕食的な開発へと移行していった。これらの開発に対するための保存措置がとられるようになったのは昭和52年以降であった。昭和53年度からは，第一次5ヶ年計画で国庫及び県費補助による「大井町東部遺跡群発掘調査事業」として記録保存のための発掘調査を実施してきた。

東部遺跡群は，文字どおり町の東部地域に集中している遺跡群の総称で，現在40ヶ所の埋蔵文化財包蔵地を確認している。昭和57年度の開発行為の中で，埋蔵文化財包蔵地内にかかり，影響を及ぼしたものは3件であった。（表1）それぞれの調査の原因は宅地建設1件，農地の天地返し1件と山林の伐根作業によるもの1件であった。調査総面積は1,613 $m^2$である。

川越街道の一宿場町から新興住宅地として大きく変貌した大井町の住民が自ら生活している町をふるさとであるためには，豊かな自然環境の保護と共に歴史的環境の保存，とりわけ地域の悠久な歴史を語る財産となっている各種の埋蔵文化財の保存と活用をこれからの町づくりに位置づけていくことが，今まさに決定的に必要条件として求められてきている。全国各地で生まれている歴史的環境保全のとりくみの経験等にも大いに学び，行政・研究者そして住民が三位一体となって考えていくことが必要であろうしこのような面でこそ埋蔵文化財が大きく貢献していくことが現代的意義ともなっている。

| No. | 遺　跡　名 | 所　在　地 | 原 因 者 | 面　積 | 調　査　期　間 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 苗間東久保遺跡第8地点 | 大井町大字苗間字神明前568-7～9 | 堀井芳江 | 360$m^2$ | 4月2日～4月9日 |
| 2 | 東台遺跡　第3地点 | 〃　大井字東台672 | 高嶋良忠 | 666$m^2$ | 5月19日～6月15日 |
| 3 | 東台遺跡　第4地点 | 〃　大井字東台671 | 野溝繁樹 | 587$m^2$ | 6月17日～11月18日 |

表1　昭和57年度発掘調査一覧表

# Ⅴ．東台遺跡第４地点

第13図　東台遺跡の調査区と地形

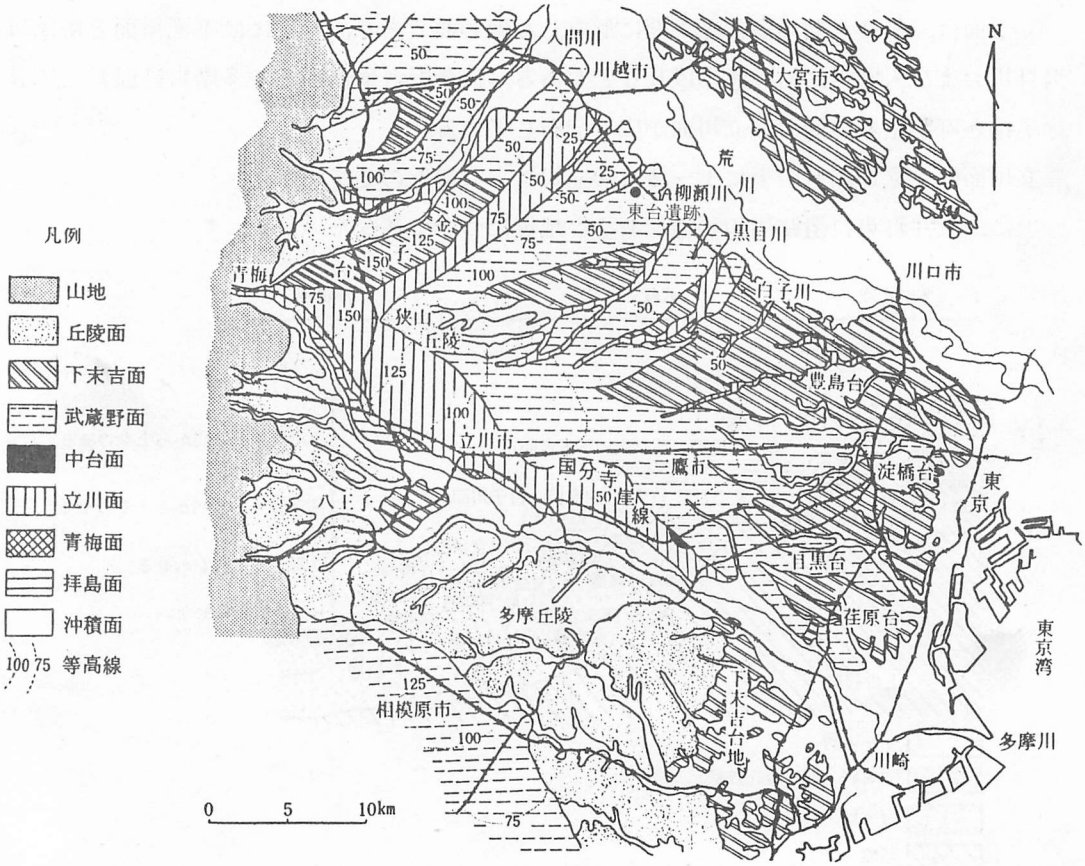
## 1．東台遺跡をとりまく地形・地質について

武蔵野台地は，東京都青梅市を扇頂とする大規模な合成扇状地で，南を多摩川，北を荒川および荒川支流の入間川と霞川に境されている。

扇頂の青梅での高さは約190 m，東に向かって次第に低くなり，所沢市街地で70m，荒川の低地に臨む地域では20 mとなっている。

武蔵野台地中央部には狭山丘陵があり，台地よりはるかに標高の高い地域になっており丘陵の西端を190 m，東端で70mの標高があり，地形はかなり開析されているが，わずかにその背面に原形をとどめている。

武蔵野台地の地形面は，関東ロームや段丘礫層の性質およびそれらの重なり方から，上位より丘陵の多摩面（T面），下末吉面（S面），武蔵野面（M面），立川面（Tc面），青柳面などに細分されている。




第14図　武蔵野台地の地形面区分図

武蔵野台地西部の金子台や所沢台は下末吉面に相当する。

下末吉面の堆積物は下末吉海進による「古東京湾」の堆積物である礫層と上位の関東ローム層から構成されている。金子台や所沢台はそれぞれ金子台礫層あるいは所沢台礫層と呼ばれているが，礫種やそのマトリックスに黒雲母を含むことから，かつての多摩川により奥多摩方面から運ばれてきたものと考えられる。また，白子川に沿う成増面にも下末吉ロームが見られ下末吉面と考えられる。

下末吉面の関東ロームの厚さは，所沢市本郷付近では，下末吉ローム５ｍ，武蔵野ローム＋立川ローム５ｍを加えた10ｍ前後である。

武蔵野面は，金子台の北東方向につづく川越台，所沢台の北方につづく台地の大井台がある。関東ローム層は，武蔵野ローム＋立川ロームで厚さ５ｍ前後である。

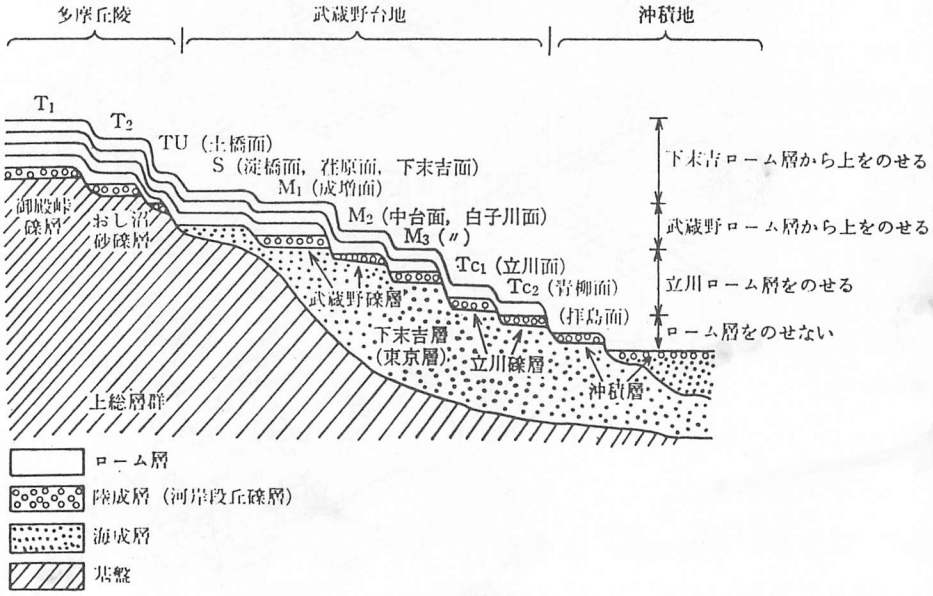
武蔵野ローム層下部には東京軽石層（TP）が見られ，南関東一帯に広く分布しているため地層の対比に役立つ重要な鍵層になっている。

武蔵野面は古東京湾の海退期に扇状地性台地が広く形成された時期である。

立川面は，最終氷期の海面低下期に形成した地形面であり，県南には不老川面と柳瀬川黒目川および入間川に沿う河岸段丘などがある。武蔵野台地南西部の多摩川に面した国分寺崖線と府中崖線の間には立川面が広く分布している。

立川面は，立川礫層の上に１～２ｍの立川ローム層をのせている。

次に，大井町東台遺跡周辺の地形および地質について述べたい。




第15図　模式的に示した武蔵野台地の段丘断面図

大井町東台遺跡は，武蔵野台地の一角を形成する不老川と柳瀬川に囲まれた大井台の上にあり，大井台をうがつ砂川堀に面した段丘崖上に位置していて，本遺跡から500m南方の同一面のボーリング柱状図から関東ロームの厚さは武蔵野ローム＋立川ロームで4.75mで下位には武蔵野礫層が重なり，武蔵野面に相当していることがわかる。

砂川堀は武蔵野礫層をけずって沖積面を形成し，台地面との比高は約10mあり，北東から南西方向に段丘崖線をつくっている。

東台遺跡の深さ3.2mの試掘(テストピット)(第17図)の場合，表土は厚さ62cmで植物体などの有機物を多量に混入し茶褐色を呈す。62cm～135cmはクラックの発達する黄褐色ローム，135cm～160cmまでは黒色帯（ブラックバンド）である。さらに160cm～32cmはやや粘土化のすすんだ黄褐色ロームになっている。立川ロームと武蔵野ロームとの明りょうな境界は見られない。なお，この黒色帯は，大井周辺地域に第Ⅰ黒色帯を欠くことが多いことから第Ⅱ黒色帯に相当しているものと考えているが詳細は今後検討してゆきたい。(西川正己)

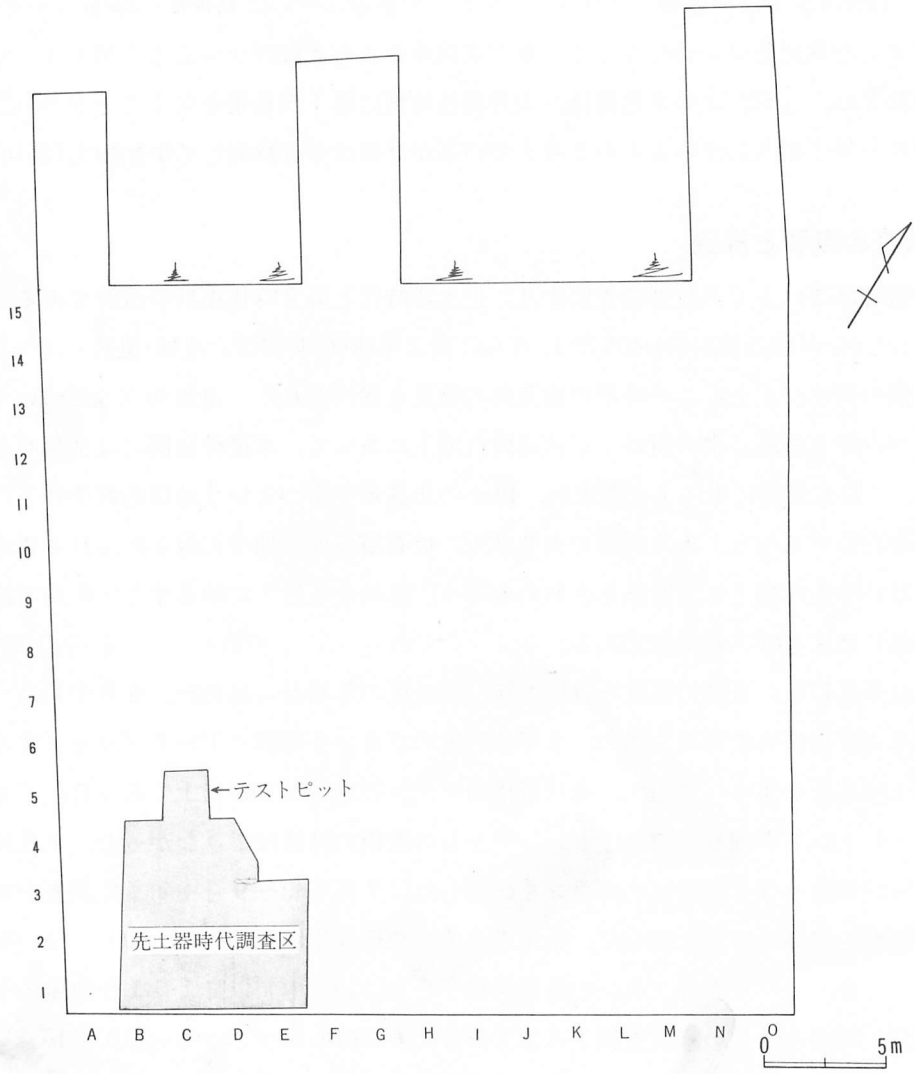
## 2．調査の概要と経過

東台遺跡はこれまでの発掘調査により，先土器時代と縄文時代中期の遺跡であることが確認されたが，今回の第3･第4地点では，さらに縄文早期･後期初頭の遺構･遺物と，須恵器の坏片と甕の破片が出土しこの時期の集落跡の発見も期待される。遺跡の立地については本書の9ページを参照。水の得にくい武蔵野台地上にあって，本遺跡周囲には文化財が多いやはり，これも非常に水によく恵まれ，10mの比高差をもつという地理的好条件下におかれているためであろう。大井戸跡や大井弁天，板石塔婆埋没地や古坂と呼ばれる鎌倉街道近世にはいり大井宿として殷賑をきわめる等々，原始から近世に致るまで，町内では所謂歴史的風致地区と呼べる地域である。

調査は6月17日，遺跡の現状写真撮影後，調査区の草刈から始めた。6月中旬はグリッドの掘りあげを中心に作業を進め，1号住居址のプランを確認。Ⅰ－7グリッドより須恵器片・土師器片を集中して出土。溝状遺構のプランの直上からの出土であった。下旬よりA・B・Cトレンチ掘りを開始。トレンチからの遺構の確認はできなかった。7月にはいり，2号住居址・3号住居址のプランを確認した。7月下旬～9月中旬まで調査を中断し9月16日から遺構の確認を急いだ。下旬より遺構の掘り下げを始めた。10月にはいり4号住居址・土壙・ピット群のプランの確認を終了した。10月中旬以降より1号住居址下の先土器時代の調査をはじめ，調査終了日まで1日に多い時に50点，少ない日でも10点の石器の出土があり，調査を終える頃には冷たい北風が強く吹く時期になっていた。

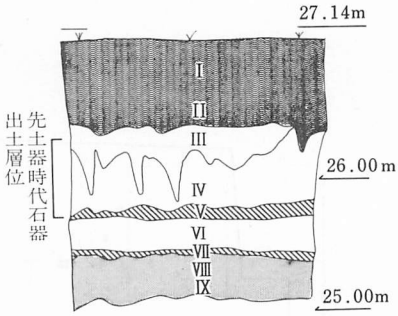
## ３．先土器時代の調査

東台遺跡での先土器時代の調査は部分的ではあるが，昭和56年度の第２地点での調査を実施している。今回の調査は，東台遺跡としてはもちろん本町において面として本格的に，一定の期間もかけ実施した唯一のものである。今回の調査区における先土器時代の発掘調査は１地点で行なったが，これまでにない貴重な成果をあげることができた。調査地点はＢ・Ｃ・Ｄ・Ｅ－１・２・３・４グリッドに位置し面積70m²の範囲で遺物総数567点を検




第16図　先土器時代調査区（$\frac{1}{300}$）

出した。ちょうど1号住居址直下にひろがっていた。1号住居址は第Ⅲ層上部まで開削され，柱穴はⅥ層上部まで及び，床面や立ちあがり精査の際や，炉中・柱穴中・覆土中からの遺物の検出が調査の端緒になった。調査は10月4日にチャート製の石核が覆土中に混入していたのをかわ切りに実施していった。1号住居址の調査をすべて滞りなく終了後より，ローム面を草掻き用の道具で丹念に削平し遺物の確認につとめた。日を追うごとに石器の出土量が増大（作業量も勿論関係するが）し，10月18日には2点，19日に5点，20日に29点，21日に40点と出土し，1日の最高出土量は79点であった。調査は予算的な問題から，東部遺跡群発掘調査としての調査を11月18日で終えた。その後の調査を町史編さん事業の一環として進めることになり結果として12月9日まで実施した。11月18日の時点での出土は278点であったが，その後の調査で約2倍の石器量が出土した。




**第17図　層　位**

第17図はC-5グリッドの深掘り北壁セクションであり，この図をもとに本遺跡の層序をみていくことにしたい。

第Ⅰ層　耕作土。黒色のサラサラした土層で，しまりがない。比較的厚く65cmある。遺物はこの層の中ごろから出土する。

第Ⅱ層　褐色土層。縄文時代遺物包含部がこの層で，場所により確認されないところもある。確認されても第Ⅰ層の攪乱を受けほとんど切れぎれに残っているのみである。住居址・土壙などこの層で確認されるが攪乱のため遺構の立上がりが確認できなかった。

第Ⅲ層　黄褐色軟質ローム層。いわゆるソフトローム層と呼ばれるものである。遺構の立上がりはこの層の上面で確認した。この層から先土器時代の石器群が出土する。

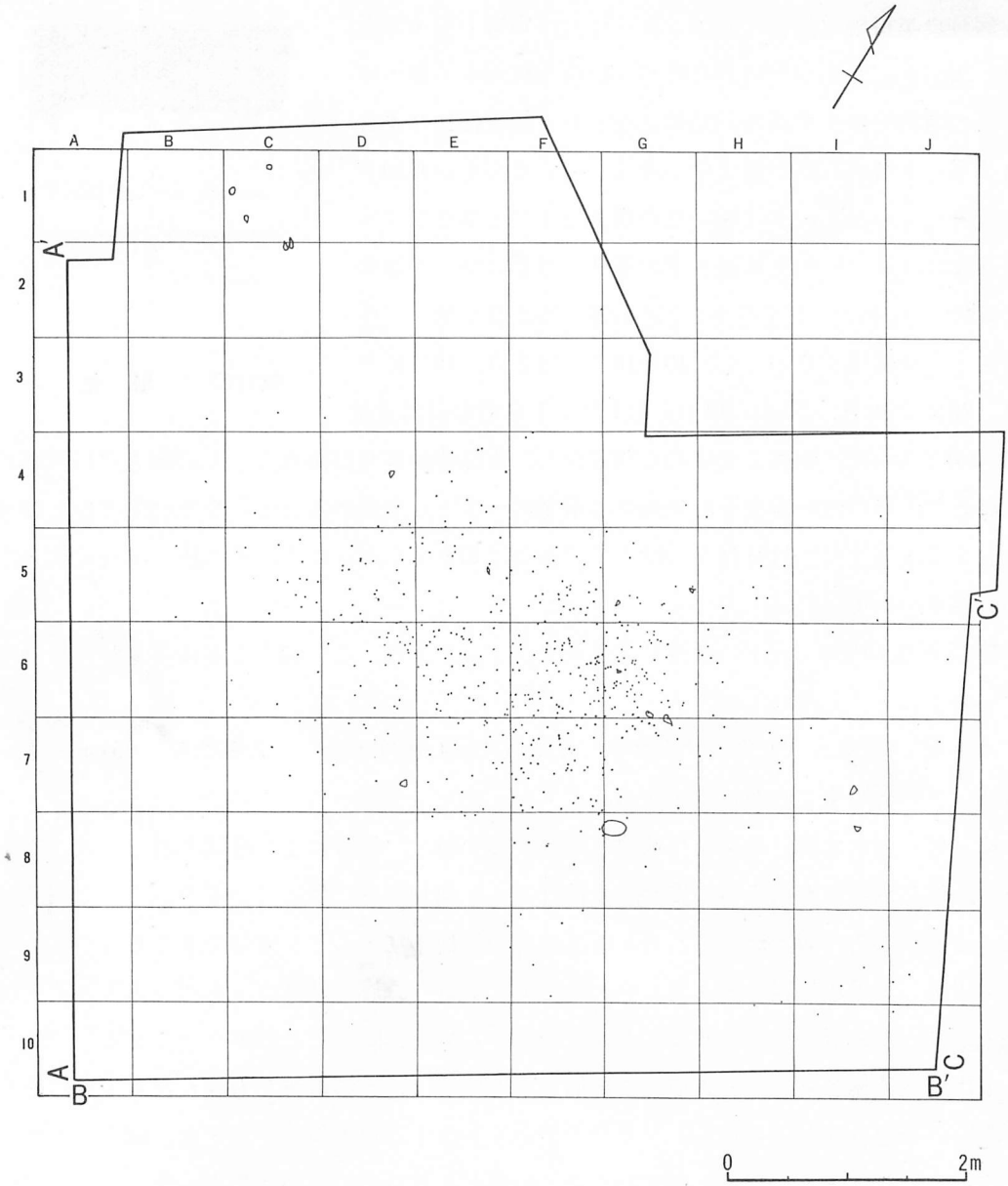
第Ⅳ層　黄褐色硬質ローム層。この層と上層の境は，どの遺跡でもみられるように凹凸の激しい不連続面がみられる。ソリクラクションによる再堆積ロームとも，何らかの原因で膨軟化したロームとも言われている。この層から数百点の石器が出土した。

第Ⅴ層　暗褐色ローム層。立川ローム第Ⅰ黒色帯。Ⅳ層と比べてやや暗色を呈すが，非常に不明瞭であった。この層からも石器が出土している。

第Ⅵ層　黄褐色ローム層。層厚25cmの硬質ロームである。

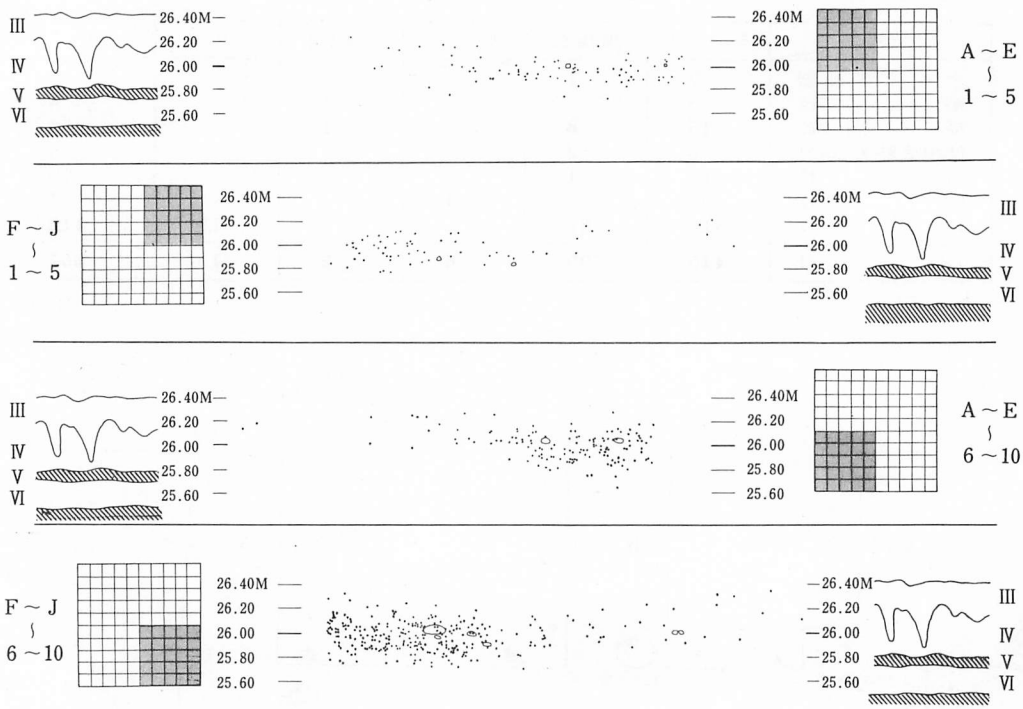
第Ⅶ層　暗褐色ローム層。立川ローム第Ⅱ黒色帯はこの層からはじまる。

第Ⅷ・Ⅸ層　Ⅷ層は確認していない。Ⅸ層は第Ⅱ黒色帯下層だが，Ⅷ層が確認されず，上位と下位においても色調・粘性等が共通するため区分できなかった。暗褐色ローム層。

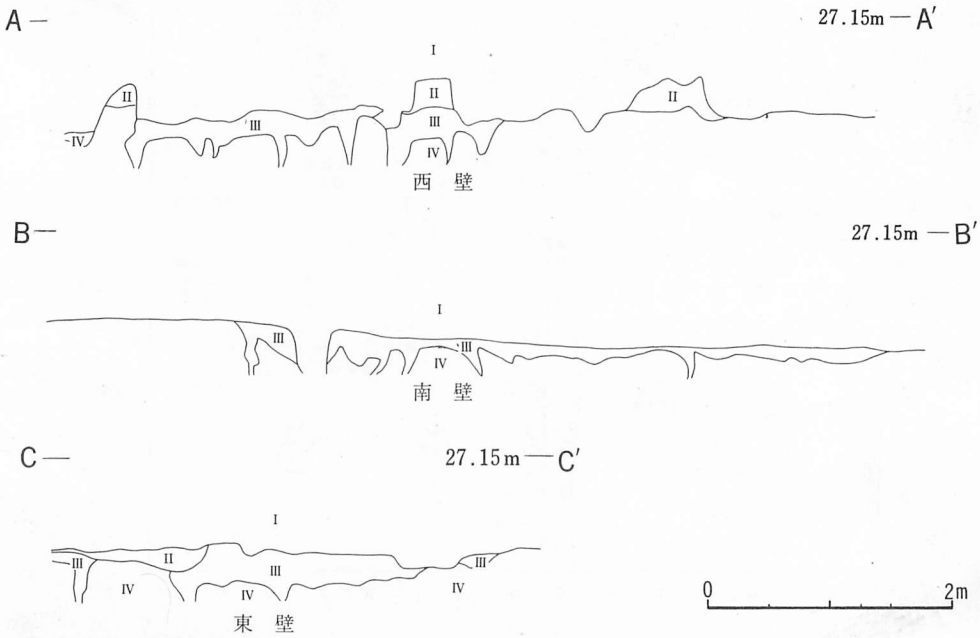



**第18図　遺物分布図（$\frac{1}{60}$）**

遺物の出土層位は，第Ⅲ層から第Ⅴ層上部の高低差67cmの範囲に集中している。最高点の標高は26.35m，最低点で25.68mで，第19図にみられるように第Ⅳ層に集中して出土している。礫群は調査区の北西部で確認されたのみで，石器の集中する部分からは20cm×12cm大の楕円形を呈する砂岩製の礫を一点検出しただけであとはすべて石器群であった。



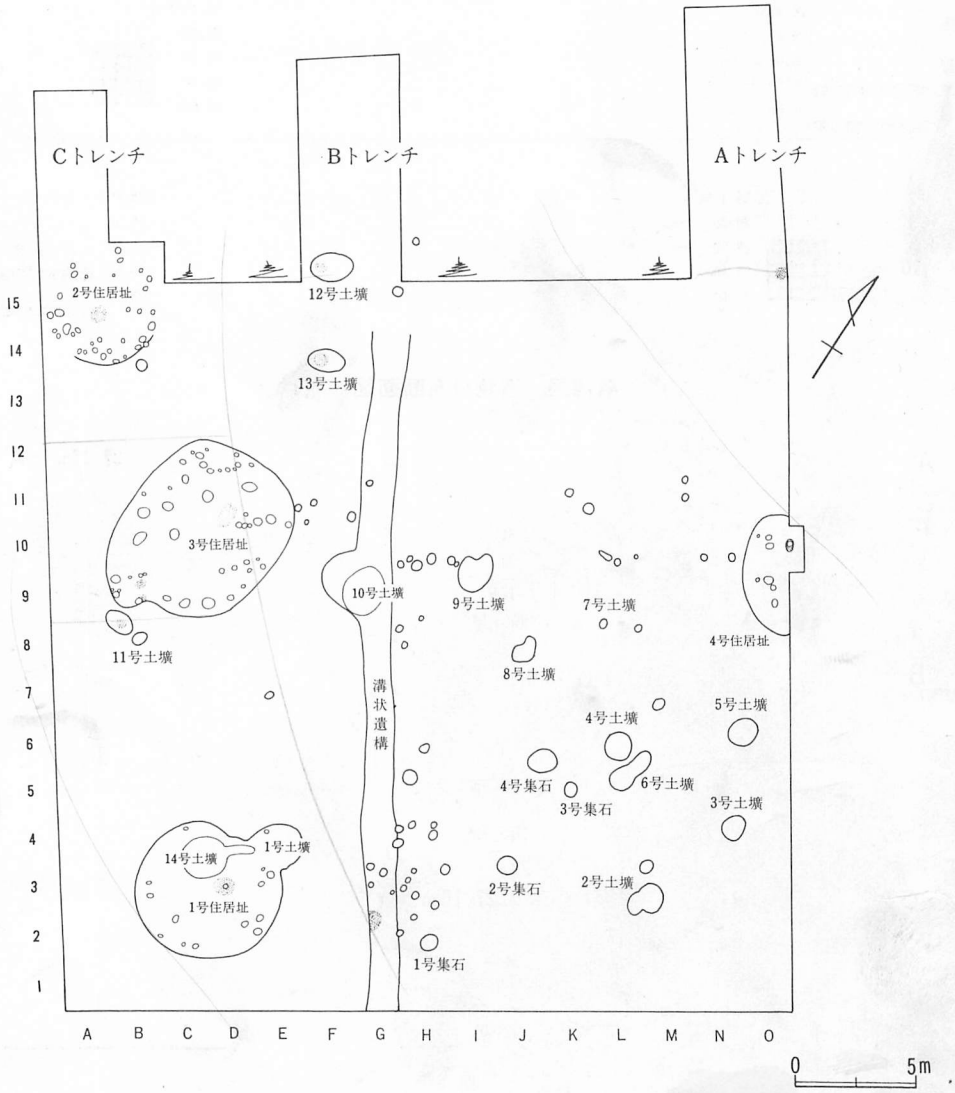

第19図　遺物分布断面図（$\frac{1}{60}$）




第20図　調査区東，南，西壁セクション図

石器群の組成は以下のようになる。

| | チャート | 黒曜石 | 頁　岩 | 粘板岩 | その他 | 合　計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ナイフ形石器 | 7 | 1 | | | | 8 |
| 彫　　器 | 3 | | | 1 | | 4 |
| 掻・削器 | 45 | 8 | 2 | 1 | | 56 |
| 使用痕跡ある剥片 | 3 | 2 | | | | 5 |
| 石　　核 | 18 | 1 | | | | 19 |
| 剥　　片 | 53 | | 4 | | | 57 |
| 砕　　片 | 316 | 87 | | | 15 | 418 |
| 合　　計 | 445 | 99 | 6 | 2 | 15 | 567 |




第21図　遺構分布図（$\frac{1}{300}$）

その他に先土器時代に属すると思われる遺物は，表土除去作業中に検出しているが，集中的な発見はなかった。それぞれの石器の実測・説明については現在まだ整理途次のため今回の報告に間にあわせることができなかった。資料整理後，すみやかに発表していきたい。

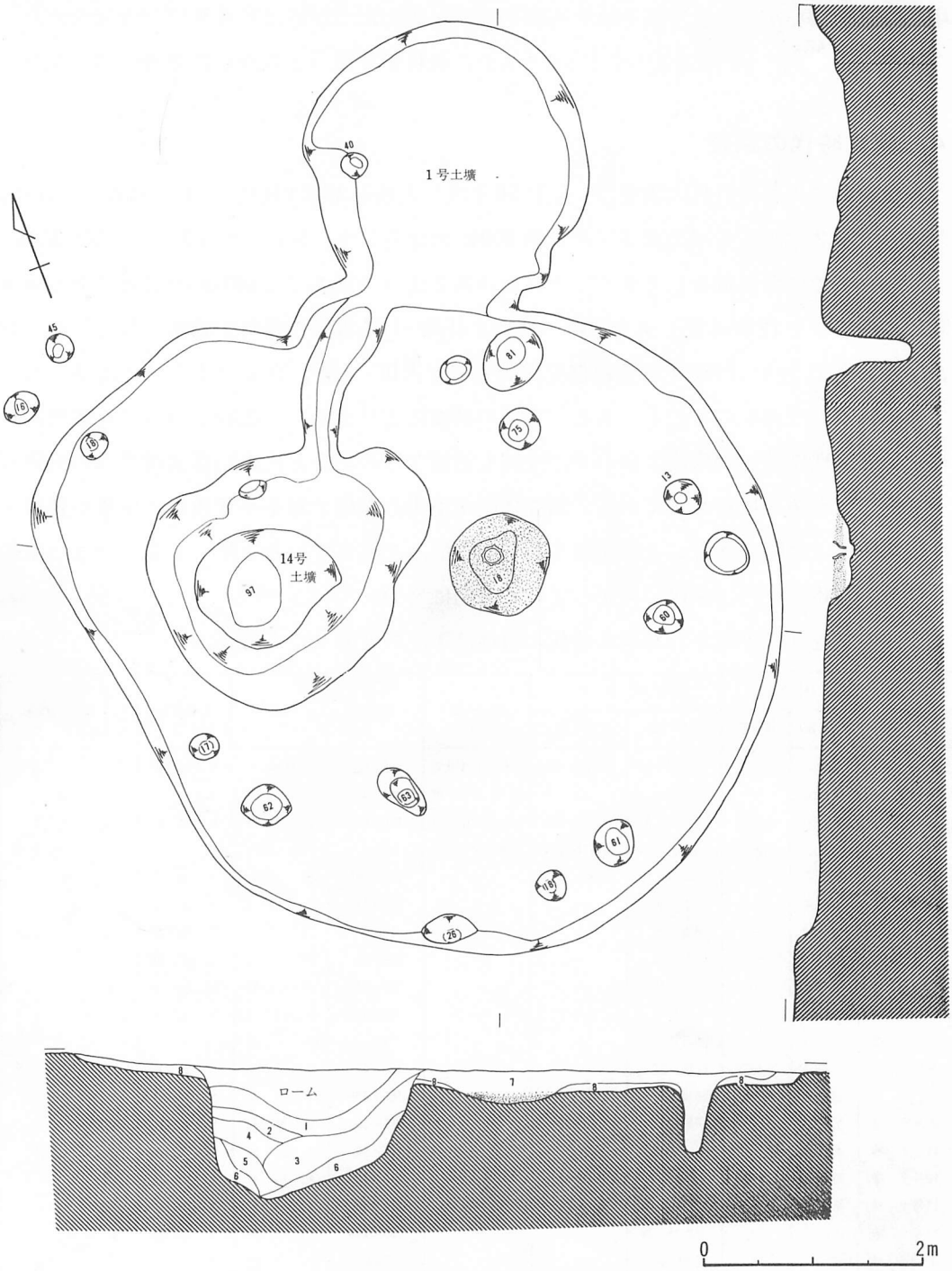
## 4．縄文時代の調査

東台遺跡での縄文時代の調査は，昭和56年度に実施した第1地点（今回の調査区の100m西側）と第2地点（今回の調査区の東側200mの地点）と，前述した第3地点（P.8～P.19）で，これまでに発掘調査してきた。とりわけ第2地点の調査では667m²の面積の中に縄文時代の住居址を12軒確認し東台遺跡の性格を特徴づける貴重な資料が収集できた。その報告は概要を紹介済（1982東部遺跡群発掘調査報告書Ⅲ）だが，非常に不十分で遺物については，目下整理途中のところである。今回の調査により出土した遺物についても報告書刊行までに整理作業が到底間に合わず，今回も遺構だけの紹介と代表的な遺物のみの掲載となったことを深く反省もしている。調査体制が不十分な中で毎年やり残しの作業が累積され広く住民に公開できないことを担当者として痛みを感じている次第である。早急に体制も整え，文化財を再び住民に還元していく方向に努力していきたい。

今回の調査区で確認された縄文時代の遺構は下記のとおりである。

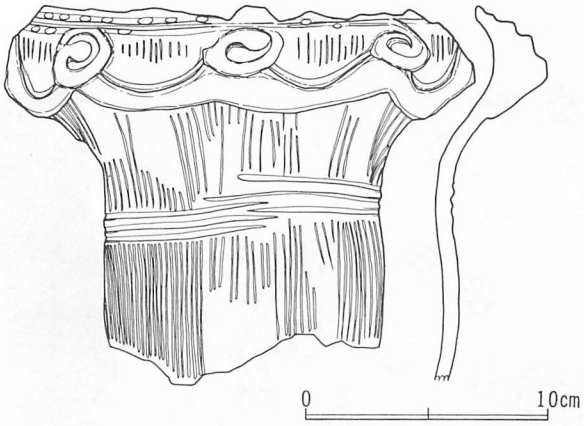
| 遺構 | 挿図番号 | | 図版番号 | | 時期 | 規模(cm) | 平面形 | 長軸方位 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 遺構 | 遺物 | 遺構 | 遺物 | | | | | |
| 1号住居址 | 第22図 | 第23図 | 図版18・19 | 図版19・30 | 加曾利EⅠ式期 | 695×600 | 不整円形 | N－56°－W | 14号土壙に切られている |
| 2号住居址 | 第24図 | — | 図版20 | — | 堀之内式期 | (480×460) | (円形) | — | 壁欠損 |
| 3号住居址 | 第25図 | 第26図 | 図版21・23 | 図版22・30 | 加曾利EⅠ式期 | 700×615 | 隅丸方形 | N－10°－E | 拡張 |
| 4号住居址 | 第27図 | 第28図 | 図版24・25 | 図版24·25·30 | 加曾利EⅡ式期 | (500cm) | (円形) | — | 東半分調査対象外 |
| 1号土壙 | 第22図 | — | 図版18・19 | 図版 26 | — | 265×260 | 円形 | N－20°－E | |
| 2号土壙 | 第29図 | — | 図版 26 | — | — | 155×125 | ひょうたん形 | N－35°－W | |
| 3号土壙 | 第29図 | — | 図版 26 | — | — | 100cm | 円形 | N－50°－E | |
| 4号土壙 | 第29図 | — | 図版 26 | — | — | 100×95 | 円形 | N－67°－W | |
| 5号土壙 | 第29図 | — | 図版 26 | — | — | 120×115 | 円形 | N－26°－W | |
| 6号土壙 | 第29図 | — | — | — | — | 175×90·70 | ひょうたん形 | N－20°－W | |
| 7号土壙 | 第30図 | — | 図版 26 | — | — | 45cm | 円形 | — | |
| 8号土壙 | 第30図 | — | 図版 27 | — | — | 130×65 | L字形 | N－30°－E | |
| 9号土壙 | 第30図 | — | 図版 27 | — | — | 160×130 | 不整形 | N－7°－W | |
| 10号土壙 | 第31図 | — | 図版 27 | 図版 27 | — | 265×200 | 不整形 | N－80°－W | 溝状遺構にきられる |
| 11号土壙 | 第25図 | — | — | — | — | 175×90 | 長楕円形 | N－81°－W | |
| 12号土壙 | 第32図 | — | — | — | — | 140×120 | 楕円形 | N－39°－E | |
| 13号土壙 | 第32図 | — | — | — | — | 170×90 | 長楕円形 | N－70°－E | |
| 14号土壙 | 第22図 | — | 図版18・19 | — | — | 265×210 | 円形 | N－75°－E | |
| 1号集石 | — | — | 図版 27 | — | — | 70cm | 円形 | — | |
| 2号集石 | — | — | — | — | — | 30cm | 円形 | — | |
| 3号集石 | — | — | 図版 27 | — | — | 80cm | 円形 | — | |
| 4号集石 | 第30図 | — | 図版 27 | — | — | 80cm | 円形 | — | |

V．東台遺跡第４地点




第22図　１号住居址・１号土壙（$\frac{1}{60}$）

柴勝氏




第23図　1号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）

### 1号住居址（第22図）

調査区の南西隅に確認された。

規　　模　695×600 cm

長軸方位　N－56°－W

プ ラ ン　不整円形

壁　　高　10～18 cm

床　　床面は軟弱

炉　　床面中央よりやや東よりに95×90cmの円形プラン。炉址内北よりに底部欠損の土器（第23図）を確認

覆　　土　住居址の覆土は7・8層。7は暗褐色。8はロームを含みしまり強い褐色土

壁　　溝　確認されず。

1号住居址は14号土壙によってきられている。プラン確認の段階では14号土壙上層部は硬質ロームでおおわれ図版18－(1)のような状況であった。14号土壙は265×210 cmの円形で，住居址床面より100 cmの深さをもつ。土層は1が粘性の強いロームブロックを含む褐色土層。2は黄褐色土層。3．黒色で粘性のあるロームブロックを含む黄褐色土層。4・5・6層はローム質だがブロック状に投げこまれたようになっている。遺物はチャート製の石核が出土した。この石核は明らかに1号住居址直下の先土器時代の遺物の中のチャート製の石器群と同一のものである。14号土壙中に混入したものであろう。

### 1号住居址出土土器（第23図）

全般的に遺物は少なく，床直からの遺物はなかった。覆土上層部より有舌尖頭器が出土したが，トレンチャーによる攪乱土中からのものである。ここに図示したのは炉体土器のみである。口径16 cm，現高15.5 cmを測るキャリパー型土器である。口唇部直下に2条の沈線が横位にめぐり，その中に楕円形刺突文が施されている。口縁部には隆帯による渦巻文と半円形が8単位構成され，隆帯は沈線によって画されている。頸部直下の胴部には横位に三条の沈線が一周する。地文には口縁部から縦位に櫛状工具による条線がほぼ全体に施されている。胎土には小石を多く含み，炉址内で二次焼成をうけているため非常にもらく色調は内外面とも上半部は赤褐色を呈し，下半部は黄褐色を呈する。胴部はややふくらみをもつ。底部欠損。

IJ・D ぐ3/4頁

第24図　２号住居址（$\frac{1}{60}$）

## ２号住居址（第24図）

調査区の北西隅に確認された。

規　　模　柱穴が巡るプランで480×460 cm

プ ラ ン　ほぼ円形

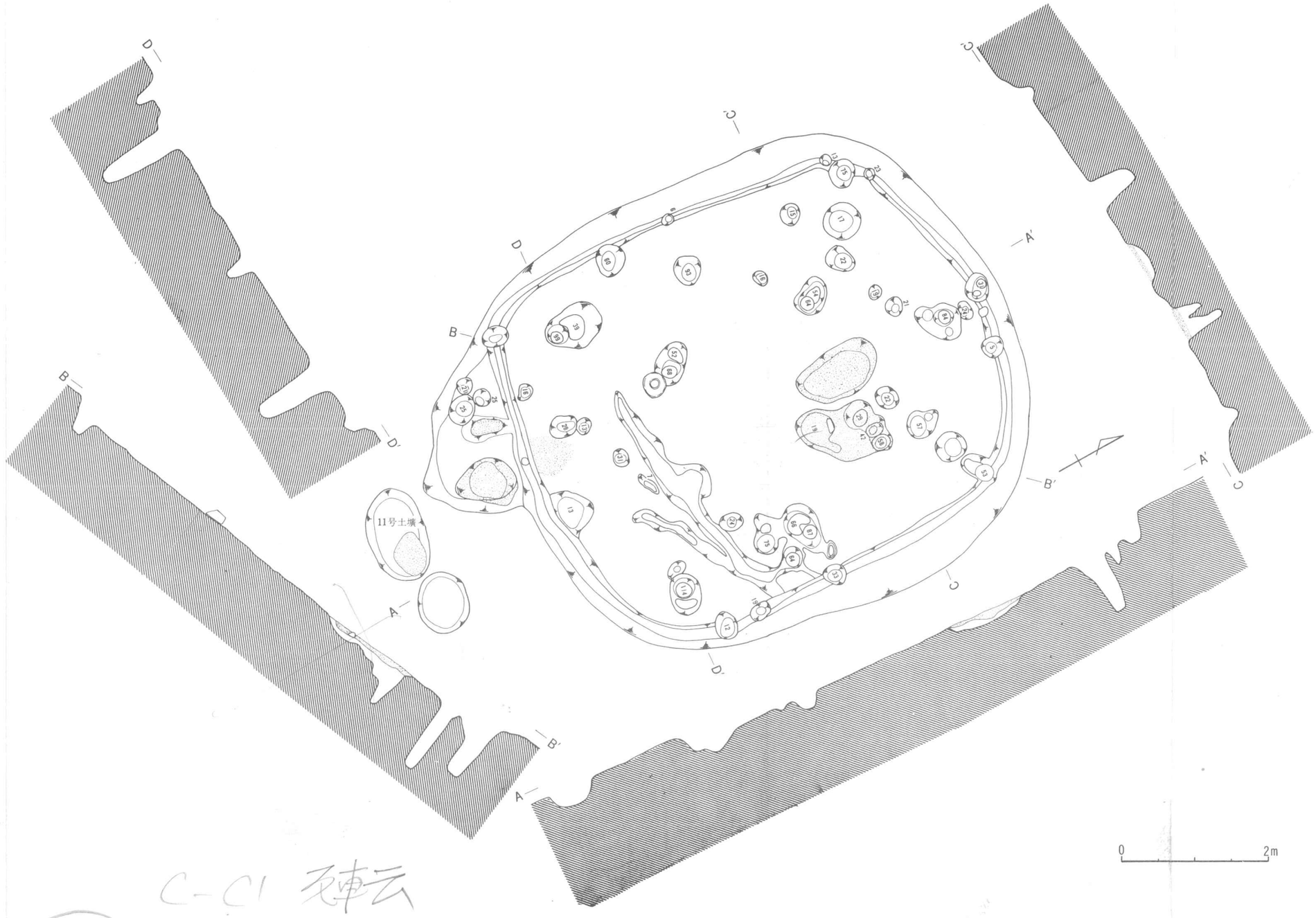
壁　　高　欠損

　床　　しまりなく軟弱である。北側へ低く傾斜している。

　炉　　ほぼ床面中央にあり70×80 cmの楕円形をなす。焼土層厚約5 cm。地床炉。

柱　　穴　壁柱穴が主体で，径10×20 cmの円形，深さ25～30 cmのものが多い。

遺　　物　遺物は少なく，床直からの遺物はなかった。（堀之内式期）

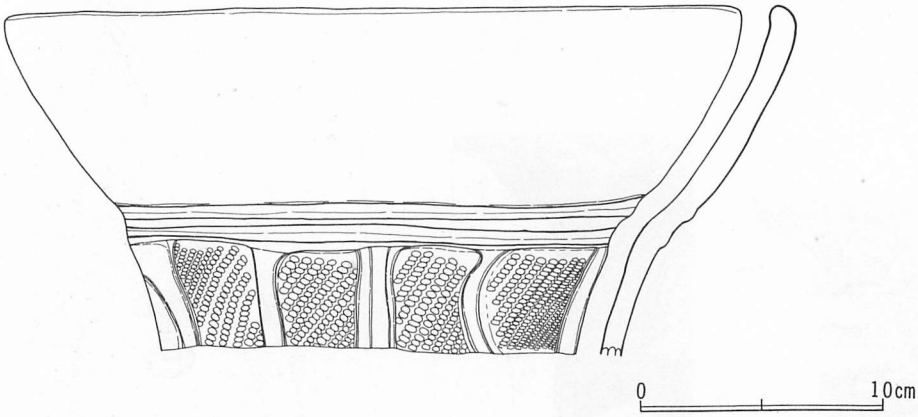



第25図　3号住居址（$\frac{1}{60}$）

C-C′ 不連云

β箱 作り直し頃に

B-B′ 不要




**第26図　3号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）**

**3号住居址**（第25図）

調査区の西側から確認された大型の住居址である。

規　　模　長径700cm，短径615cm

長軸方位　N－10°－E

プ ラ ン　隅丸方形

壁　　高　20cm

床　　よく踏み固められ平坦である。

炉　　床面中央よりやや北よりに125×65cmの長楕円形で焼土層厚12cmの地床炉とすぐ東隣りに柱穴をともなう120×70cmの不整形で焼土層厚10cmの地床炉の2つの炉がある。

柱　　穴　7本が主柱穴になると思われる。

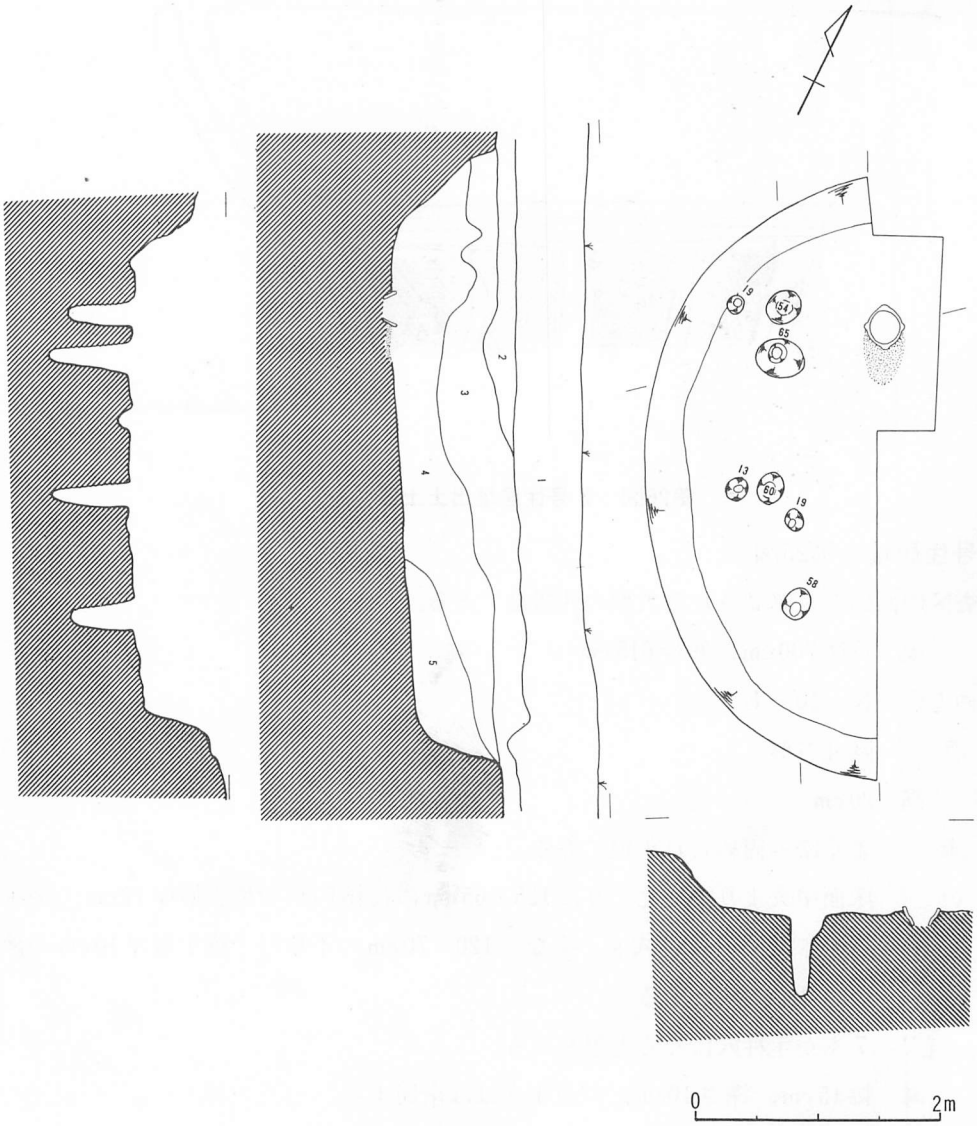
壁　　溝　幅15cm，深さ10cm，壁直下をほぼ全周する。

遺　　物　遺物の出土量は多く，床面直上より胴下半部以下を欠損した深鉢形土器が口縁部を下にして出土した。

覆　　土　床面直上はロームを含むしまりのある暗褐色土で，全体的に非常にしまりのある黒褐色土層で，土器や礫を多く含む。

本住居址は，壁溝が一周するが，床面南側に壁溝と思われる溝が2重に検出された。内側の壁溝の幅は20cmで深さ10cm，外側の幅は10～15cmで深さ5cm程度と浅い。

住居址は壁溝や柱穴の状態から考慮して，拡張を含め最低一回以上の建て替えを行なったと思われる。

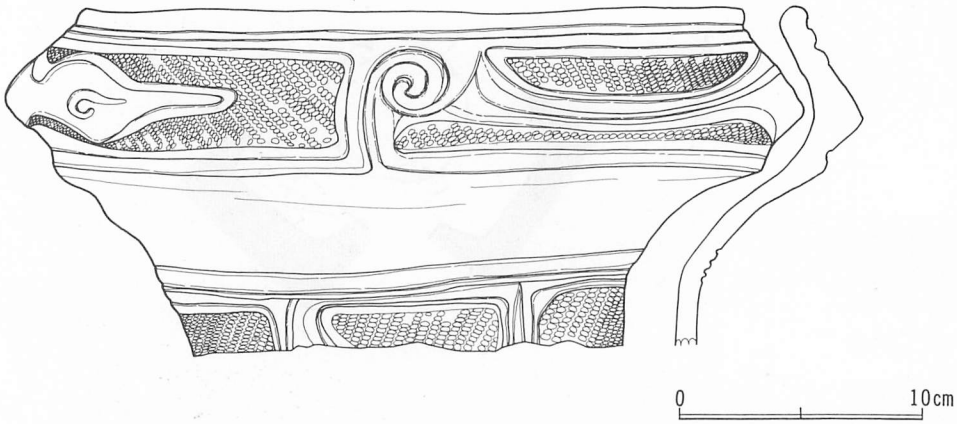



**第27図　４号住居址**（$\frac{1}{60}$）

３号住居址の南側の張り出しには，焼土が２ヶ所認められたが，３点住居址を切って土壙を掘削し，そこでの火の使用の痕跡と推定される。張り出し部分から遺物は出土していない。３号住居址は規模も大型で，遺物の出土量も多く遺物の遺存状態は良好であった。

**３号住居址出土土器**（第26図）

床面直上より柱穴に接して出土した。胴部下半部を欠損する。口径29cm・現高14.5cm，




**第28図　4号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）**

キャリパー形を呈する深鉢形土器である。口縁部は無文帯で，頸部に2条の巾広の粘土紐をうすく貼付け，そこから2条一単位の直線的な隆帯の懸垂文と1条の蛇行する隆帯の懸垂文がある。胴部の地文にはＬＲの縄文を施している。砂を少し含み，焼成は良好。色調は外面が茶褐色と黒褐色，内面が茶褐色を呈する。

**4号住居址**（第27図）

調査区の東端で確認された。

規　　模　直径500cm（推定）　東側半分調査対象区域外

プ ラ ン　円形（推定）

壁　　高　65～70cm

床　　よく踏み固められ良好。

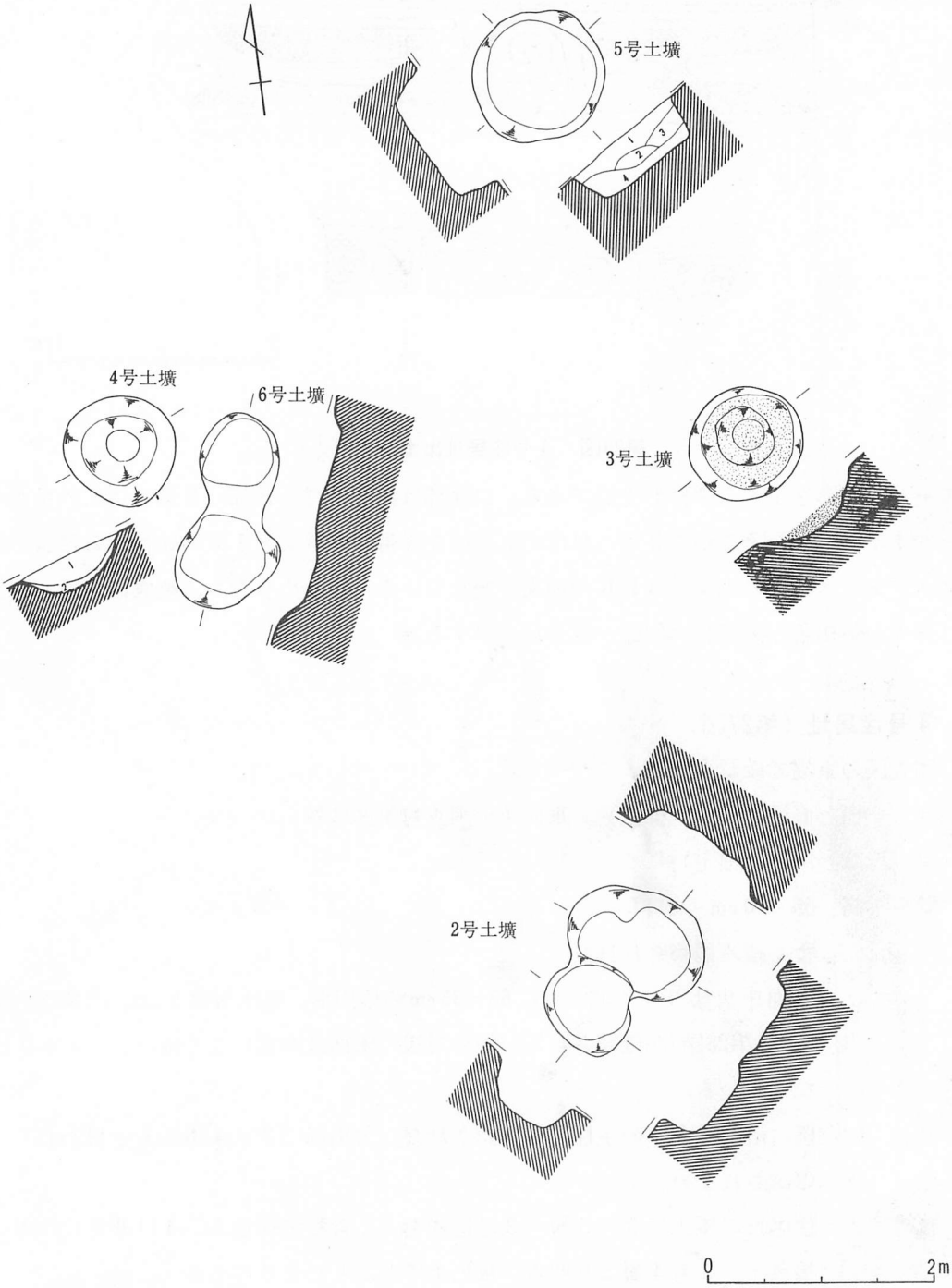
炉　　床面中央よりやや北よりに65×35cmの楕円形。焼土層高5cm。北側に埋設土器（第28図）が確認される。炉の周辺の床面は非常によく焼け，レンガ状になっている。

柱　　穴　壁に沿って3本の主柱穴が確認された。欠損部に3～4本あると思われる。

壁　　溝　確認されない。

覆　　土　住居址の覆土は3～5層。3は遺物を多く含む暗褐色土。4は非常にかたい褐色土。5も4層より明るい褐色土でとてもしまりがある。

遺　　物　住居址からの出土はきわめて少ない。炉の埋設土器以外にまとまっての出土はない。ただし第3層上部より縄文後期の土器片が出土している。




第29図　土　　壙（$\frac{1}{60}$）

**4号住居址出土土器**（第28図）

口径27cm，現高15cmで胴部下半分を欠損するキャリパー形の深鉢土器である。口唇部直下には横位の沈線が施されている。口縁部文様帯は隆帯により長楕円形や渦巻文を形成している。地文は原体ＲＬの縄文を施文している。頸部の文様体はなく，胴部との境に2条の沈線をめぐらせ3条一単位の直線的な沈線と蛇行する1条の沈線による懸垂文で区画している。胴部の地文の原体はＬＲの縄文が施されている。

**1号土壙**（第22図）

形　　状　円形
規模(長×短)　265×260cm
深　　さ　30cm
主軸方向　N－20°－E
ピ ッ ト　1
壙　　底　擂鉢状

**2号土壙**（第29図）

形　　状　ひょうたん形
規模(長×短)　155cm×125cm(北)・85cm(南)
深　　さ　20cm(北)・30cm(南)
主軸方位　N－35°－W
壙　　底　ほぼ水平

**3号土壙**（第29図）

形　　状　円形
規模(長×短)　100cm
深　　さ　15cm
主軸方位　N－50°－E
壙　　底　擂鉢状
覆　　土　底面部に層厚15cmの焼土
　　上層部は暗褐色

**4号土壙**（第29図）

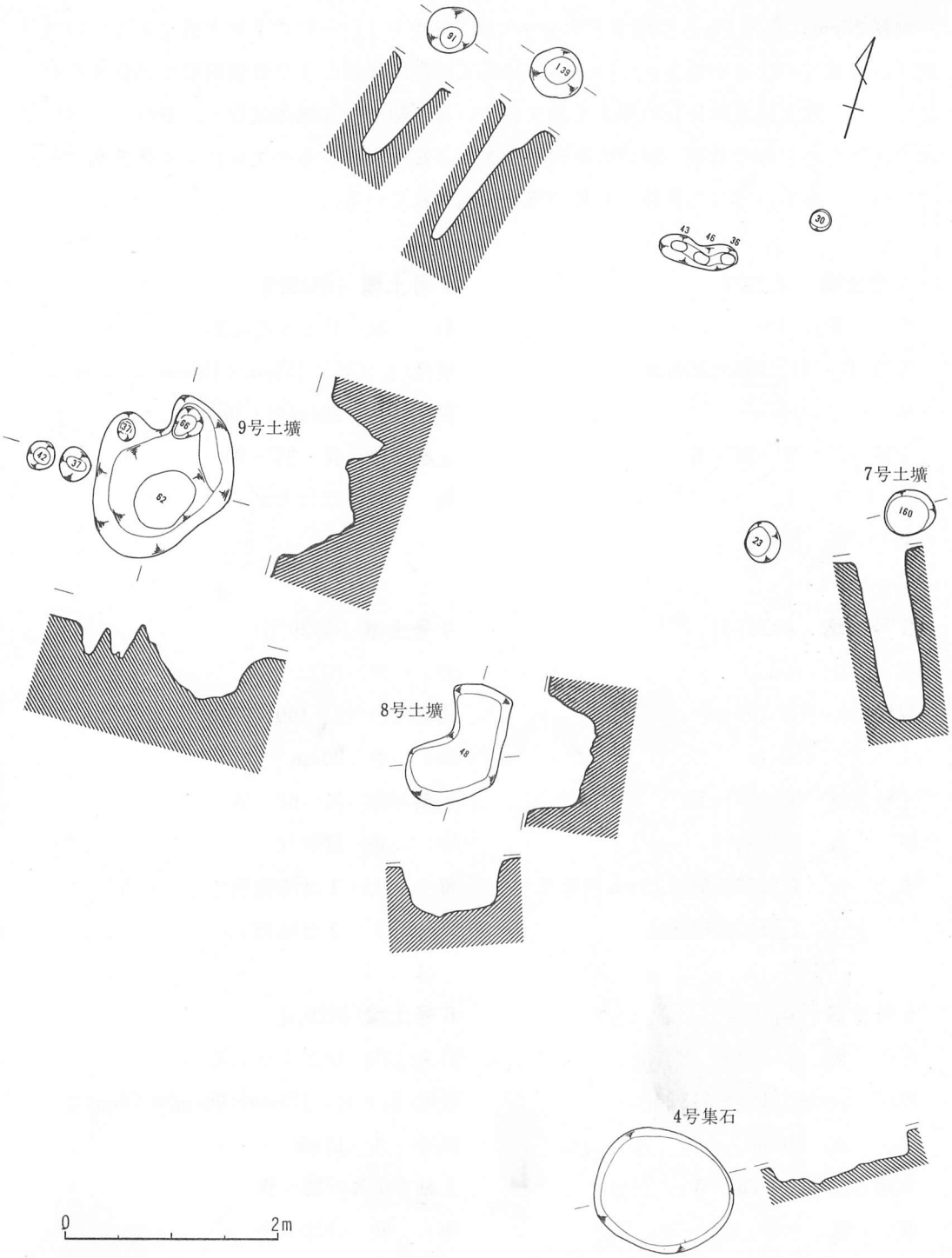
形　　状　円形
規模(長×短)　100×95cm
深　　さ　20cm
主軸方位　N－67°－W
壙　　底　擂鉢状
覆　　土　1は暗褐色でしまり有
　　2は褐色土

**5号土壙**（第29図）

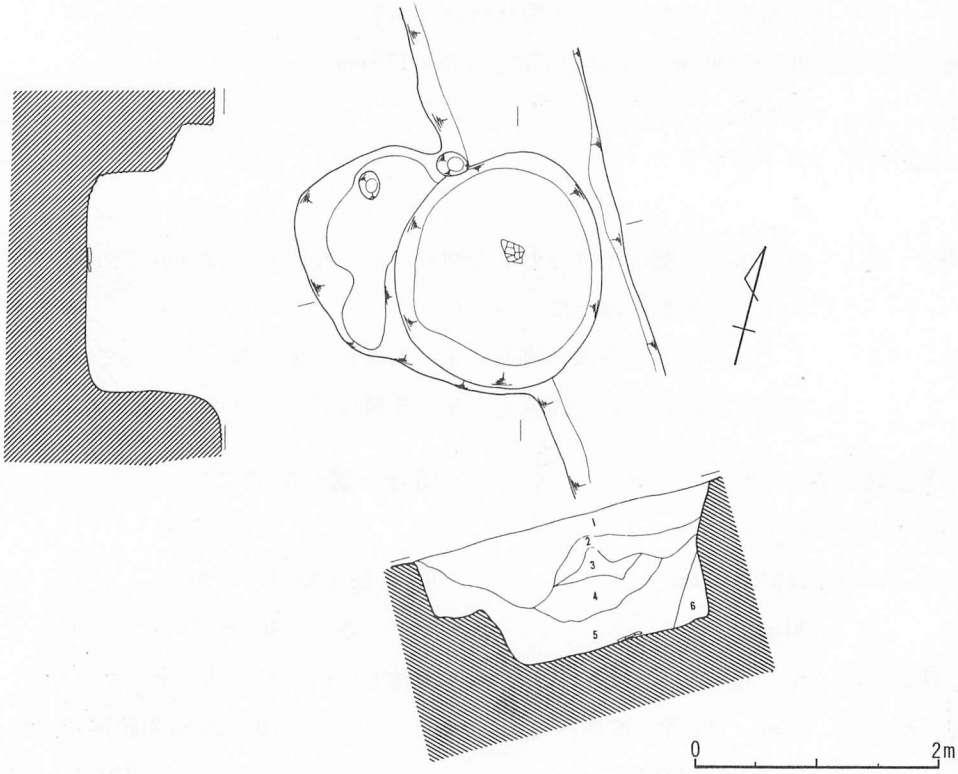
形　　状　ほぼ円形
規模(長×短)　120×115cm
深　　さ　40cm
主軸方位　N－26°－W
壙　　底　水平
覆　　土　1・2層より遺物出土
　　4は暗褐色でしまり有

**6号土壙**(第29図)

形　　状　ひょうたん形
規模(長×短)　175cm×90cm(南)・70cm(北)
深　　さ　15cm
主軸方位N－20－W
壙　　底　ほぼ水平




第30図　土壙・集石（$\frac{1}{60}$）




第31図　10号土壙（$\frac{1}{60}$）

**7号土壙**（第30図）

形　　状　　円形

規　　模　　直径45cm

深　　さ　　160cm

断　　面　　壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面は25cmと狭い。

**9号土壙**（第30図）

形　　状　　不整形

規模(長×短)　160×130cm

深　　さ　　60cm

主軸方位　　N－7°－W

ピ ッ ト　　2

壙　　底　　擂鉢状

**8号土壙**（第30図）

形　　状　　L字形

規模(長×短)130cm×65cm

深　　さ　　45～50cm

主軸方位　　N－30°－E

壙　　底　　ほぼ水平

**11号土壙**（第25図）

形　　状　　長楕円形

規模(長×短)　175×90cm

主軸方位　　N－81°－W

焼　　土　　60×45cmの範囲で壙底近くに分布。層厚5cm。

壙　　底　　ほぼ水平

**10号土壙**（第31図）

形　　状　　不整形。土壙中心部の形状はほぼ円形

規模(長×短)265×200cm。土壙中心部は195×175cm

深　　さ　　110cm

主軸方位　　N－80°－W

ピ ッ ト　　2

壙　　底　　ほぼ水平。壁は開口部近くで傾斜が緩くなるがほぼ垂直である。西側にテラスをもち階段上に立ち上がる。

覆　　土　　1・2層は溝状遺構の覆土で3～6層が土壙の覆土となっている。3層は縄文土器片を含む褐色土。5・6層はロームブロックを含む。

**12号土壙**（第32図）

形　　状　　楕円形

規模(長×短)140×120cm

深　　さ　　30cm

長軸方位　　N－39°－E

焼　　土　　50cmの範囲で壙底西よりに集中。層厚5cm

壙　　底　　凹凸をなし，ゆるやかにカーブする。

**13号土壙**（第32図）

形　　状　　長楕円形

規模(長×短)170×90cm

深　　さ　　40cm

長軸方位　　N－70°－E

焼　　土　　70×55cmの範囲で壙底西よりに集中。層厚5cm。

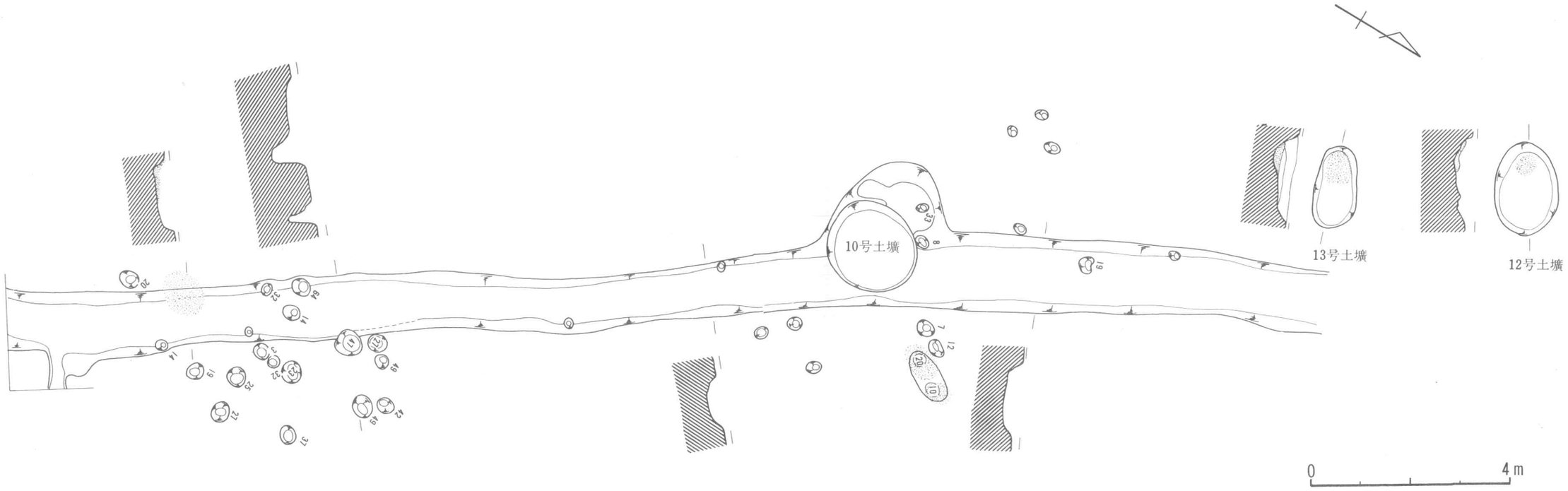
壙　　底　　ゆるやかにカーブしている。

**14号土壙**（第22図）

1号住居址（P.31）の項を参照。

## 集　石

集石は4基確認された。そのうち掘り込みをもつものは4号集石のみである。1号集石は，拳大以下の礫が，径70cmの範囲内に分布している。2号集石は小礫が径30cmの範囲内に認められる。3・4集石は拳大以下の角礫が径80cmの範囲内に集中している。集石は調査区の南東部のみに検出された。礫は熱を受けているものはなく。焼土も分布していなかった。覆土は黒褐色土層。遺物の確認はなかった。時期不明。




第32図　溝状遺構（$\frac{1}{60}$）

## 5．その他

### 溝状遺構（第32図）

調査区域のほぼ中央部分を南東より北西方向にかけて一直線状に走る溝状遺構を1本確認した。上幅で110～120cm，溝底幅で60～80cmの規模で崖線に向けて掘られている。調査区南側での確認面からの深さは20～25cmだが，崖線に近くなるにつれてローム面への掘り込みはほとんどなくなる。ローム面が崖線にむかうにつれ落ちこみ，当然溝状遺構のローム面への掘り込みは浅くなり，またはほとんど達しない状態にある。ローム層上層の褐色土、黒褐色土層に掘り込まれ崖に達していると思われる。今回確認されたのは長さ26mまでであった。

覆土は非常にパサパサした軟質な黒色土を主体としている。覆土中には縄文土器片・土師器片・須恵器片等が出土している。

またこの溝状遺構は10号土壙を切っている。また溝の南側部分にはピットが集中している地点があり焼土もみられるところから，住居址を切っていることも考えられる。

# VI. ま と め

昭和57年度に実施した発掘調査の報告をしてきたが反省すべき点が多々めだつ。遺跡の発掘調査報告書は，できるだけ早く完全な形で刊行されるのが普通の姿であり，また，そうする方向に努力を傾けることは，担当者の責務でもある。しかしながら，今年に限らないが遺物を中心に図版・写真の掲載ができず説明もほとんど加えられなかった。とりわけ東台遺跡第4地点の膨大な遺物の集録が欠けているという点では本報告とは銘うてない。報告書を刊行し，その成果を公開し世に問うという作業を経てはじめて一つの発掘調査が終了したといえるのなら，まだまだ今の現状では発掘調査を終えたとは胸をはって言えない状況である。一朝一夕にはなし難いがいくつかの面で改革もし対応を考え，現況を変革することは必要で，またおし進めていかなければならない。そうしなければ、毎年毎年発掘調査の資料は累積されるばかりで，地域で文化財保護・考古学の課題をやりあげる目標は不鮮明に映るだけになってしまう。その点では調査体制の確立も大きな側面ももっていよう。

今年度の調査は三ヶ所で実施し，それぞれについてまとめにかえて以下に記す。

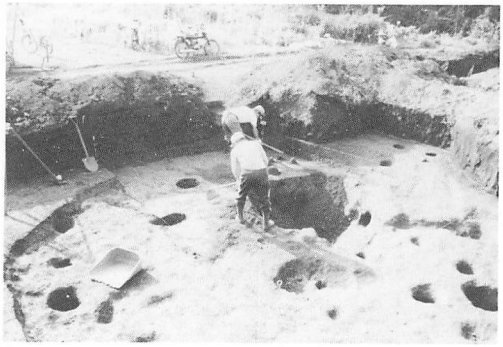
苗間東久保遺跡は，縄文時代早期後半の条痕文土器をともなう炉穴・土壙，中期後半加曾利ＥⅠ・ＥⅡ式期の竪穴住居址，後期初頭の称名寺式期の竪穴住居址，堀之内式期の土壙墓群等が検出され最近注目もされてきている。今回の調査区は遺跡の西南端に位置し，

図版12　東台遺跡第４地点

(1)　遺跡近景（草刈り前）

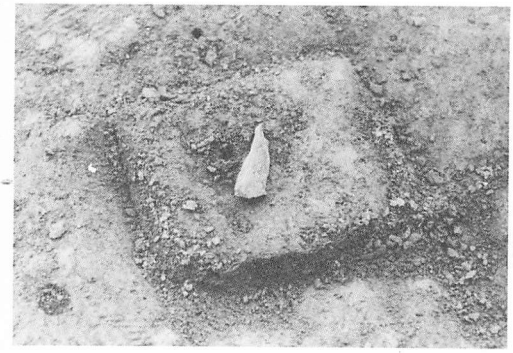
(2)　遺跡近景（草刈り後）

図版13　東台遺跡第4地区



(1)　先土器時代調査区

(2)　層　　位



(3)　遺物出土状態

(4)　遺物出土状態

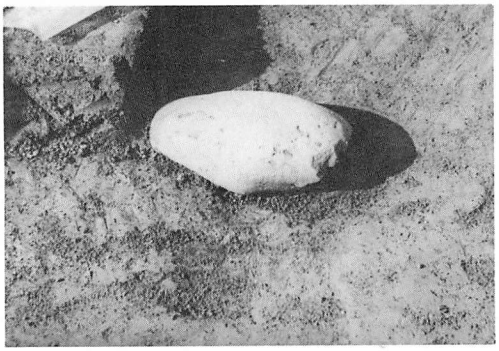
(5)　遺物出土状態

(6)　遺物出土状態

(7)　遺物出土状態

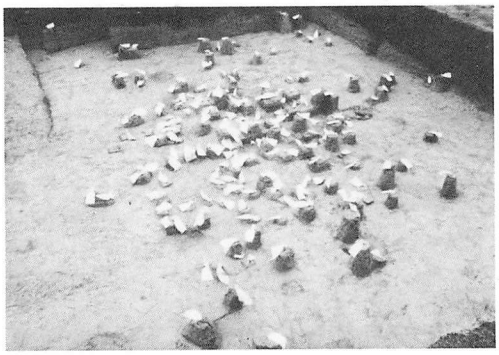
(8)　作 業 風 景

図版14　東台遺跡第４地点



(1)　遺物出土状態

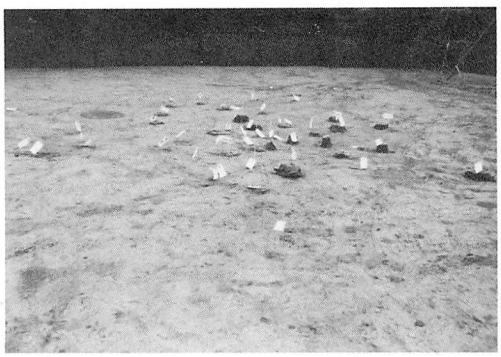
(2)　遺物出土状態



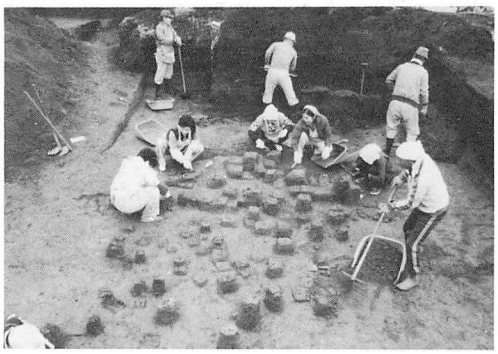
(3)　遺物出土状態

(4)　作業風景

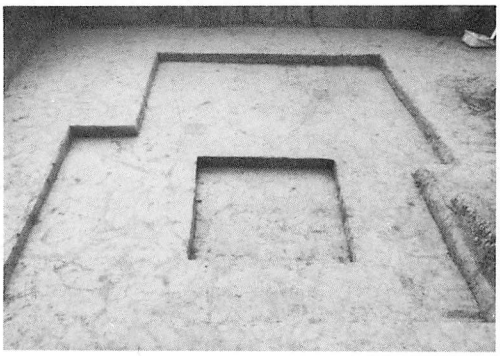
(5)　出土状態



(6)　出土状態



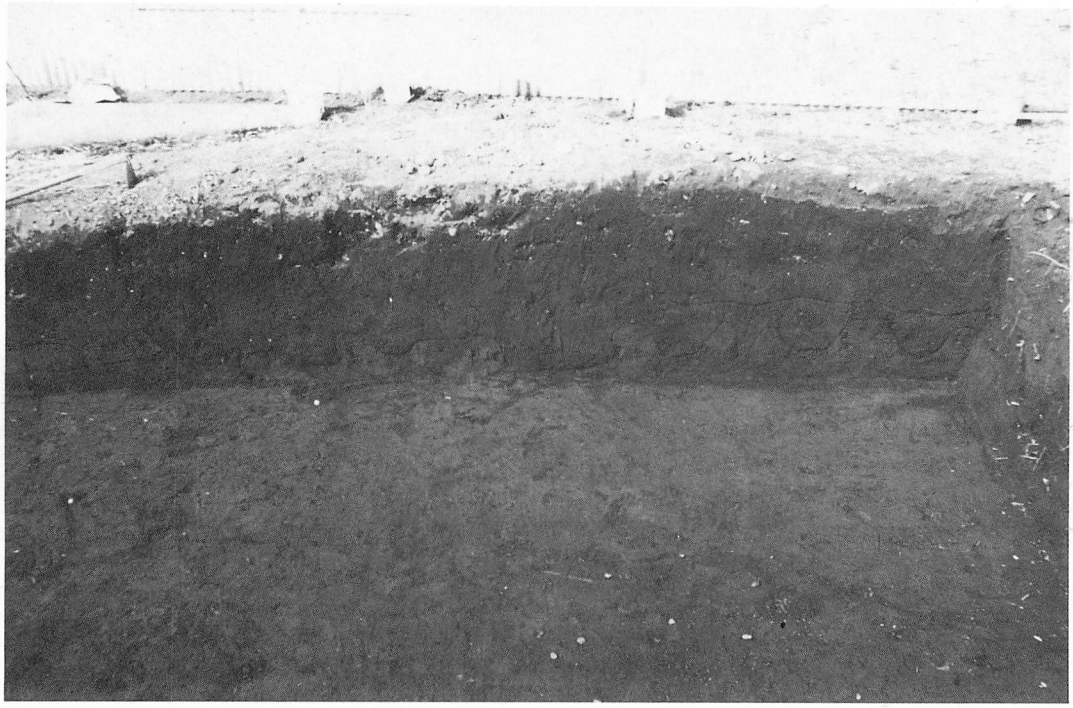
(7)　作業風景



(8)　調査終了状態

図版15　東台遺跡第４地点

(1)　グリッド発掘風景



(2)　Ａトレンチ土層断面

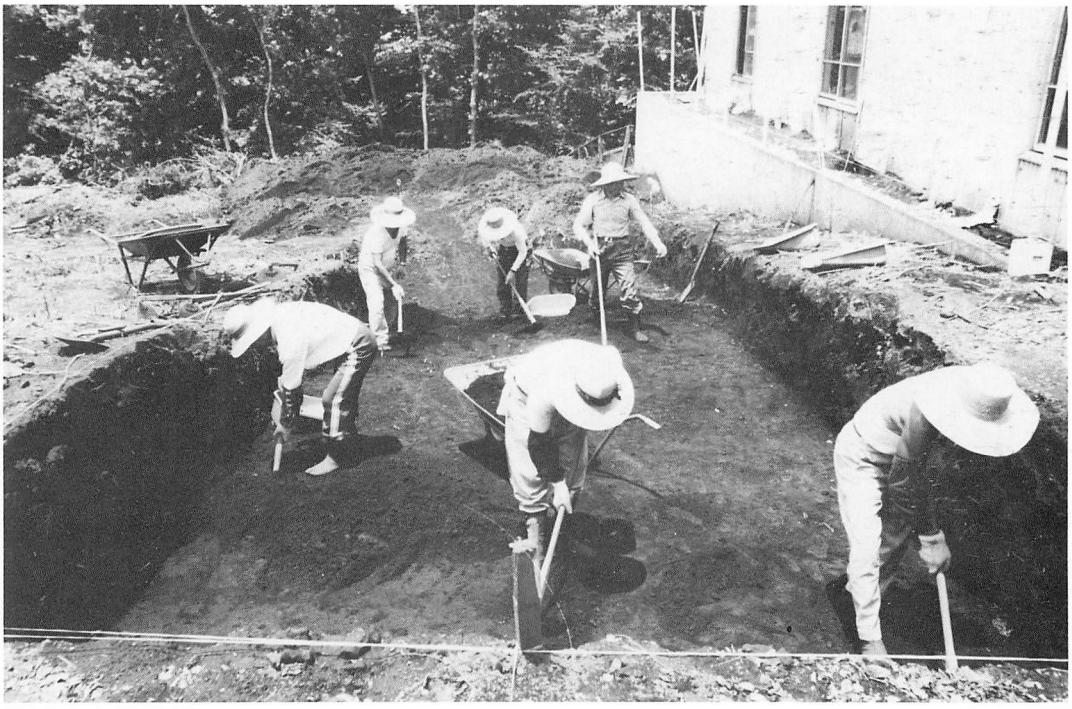
図版16　東台遺跡第４地点

(1)　発掘風景

(2)　須恵器出土状態

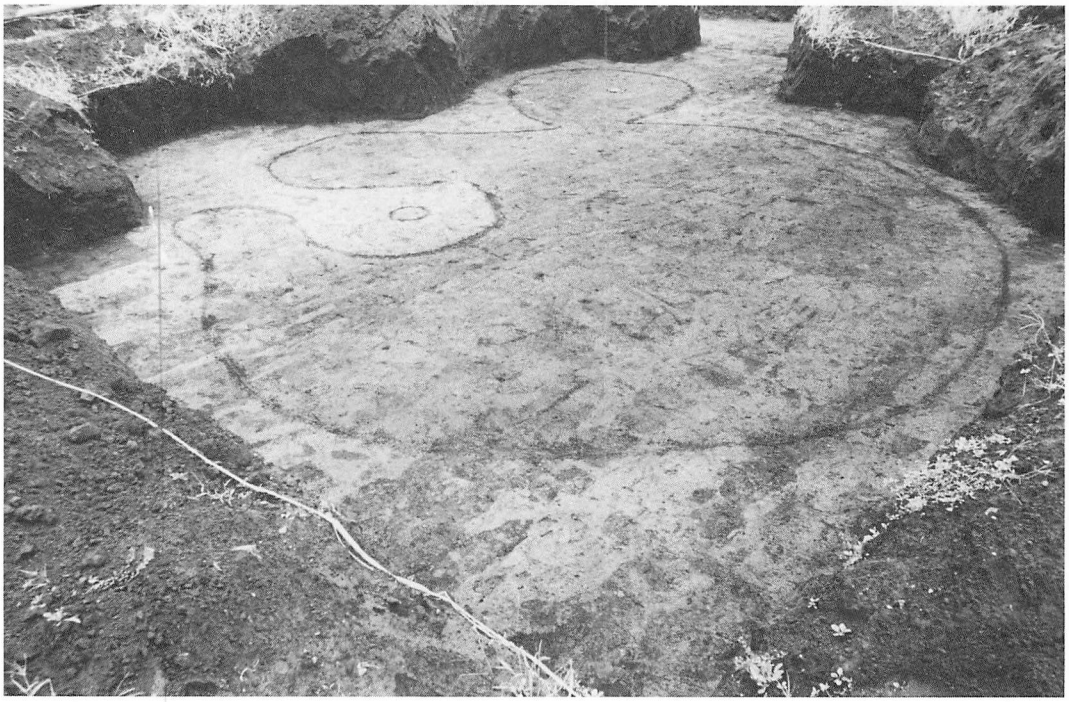
図版17　東台遺跡第４地点

(1)　石器出土状態

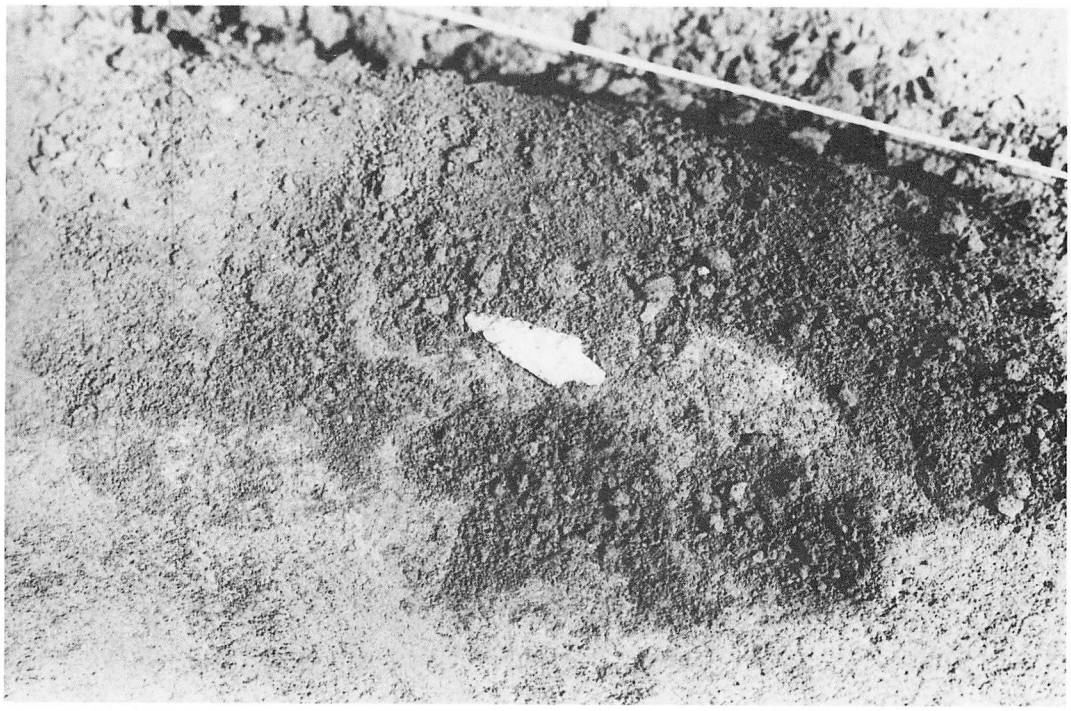


(2)　発掘風景

図版18　東台遺跡第４地点



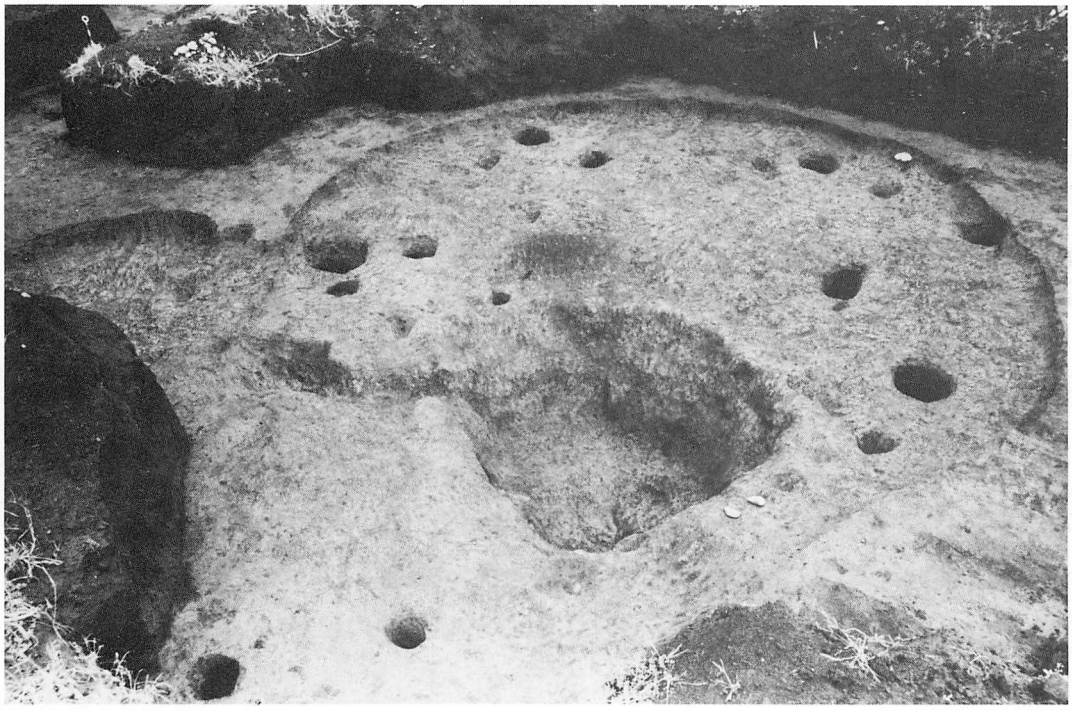
(1)　１号住居址プラン



(2)　有舌尖頭器出土状態

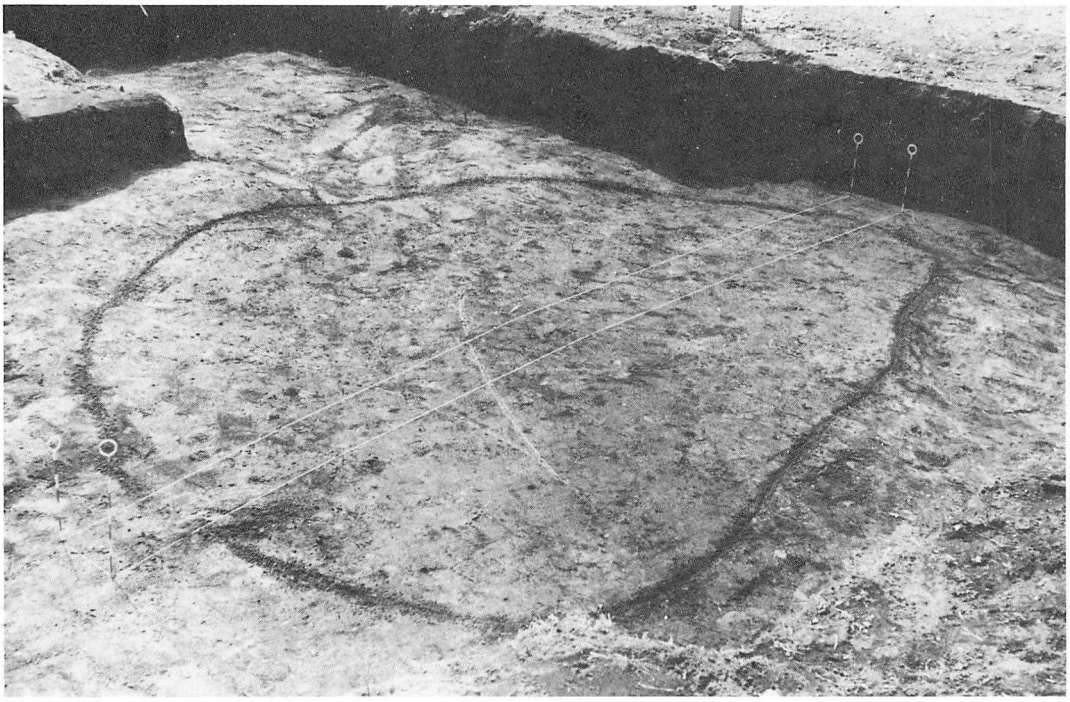
図版19　東台遺跡第４地点

(1)　炉体土器

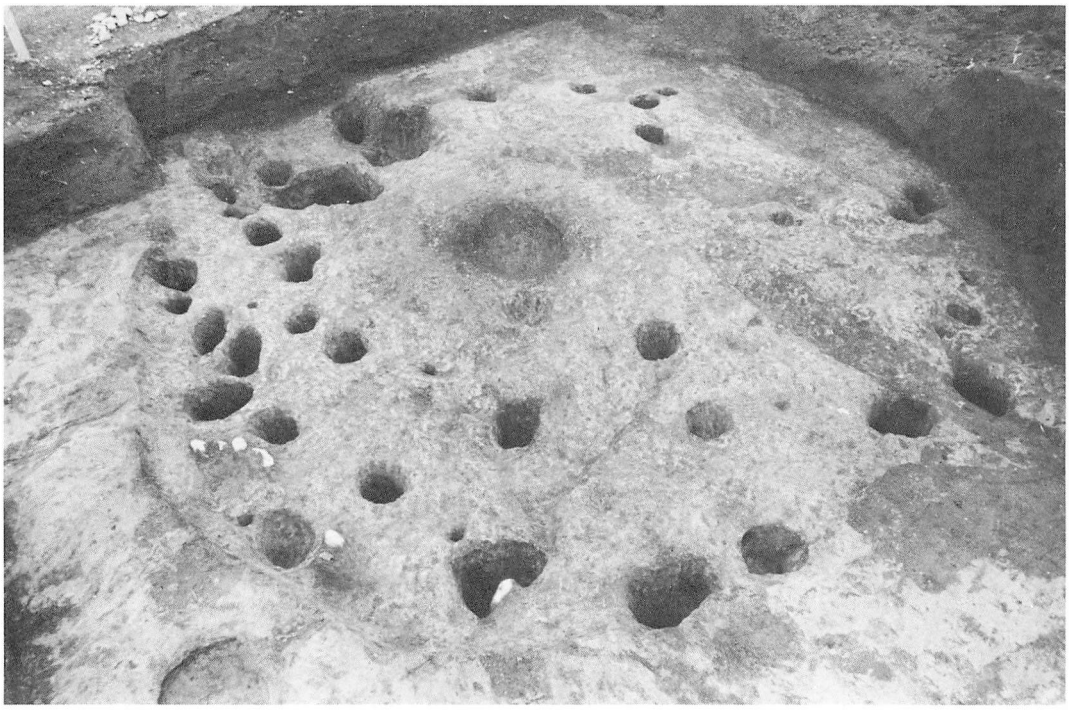


(2)　１号住居址

図版20　東台遺跡第４地点

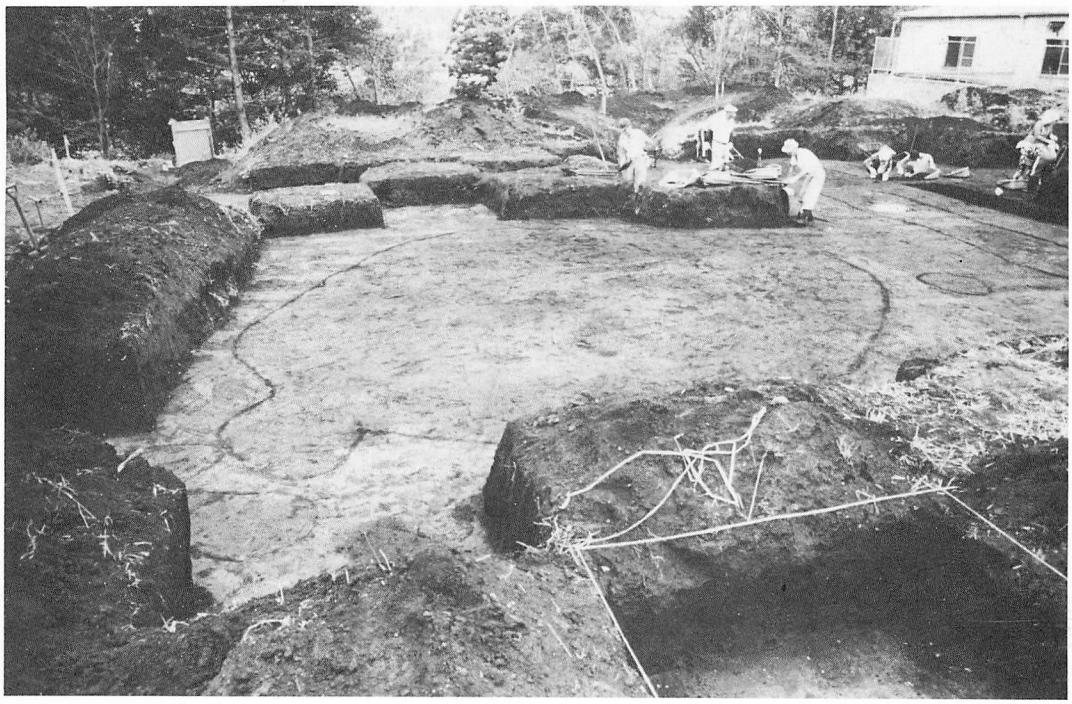


(1)　２号住居址プラン



(2)　２号住居址

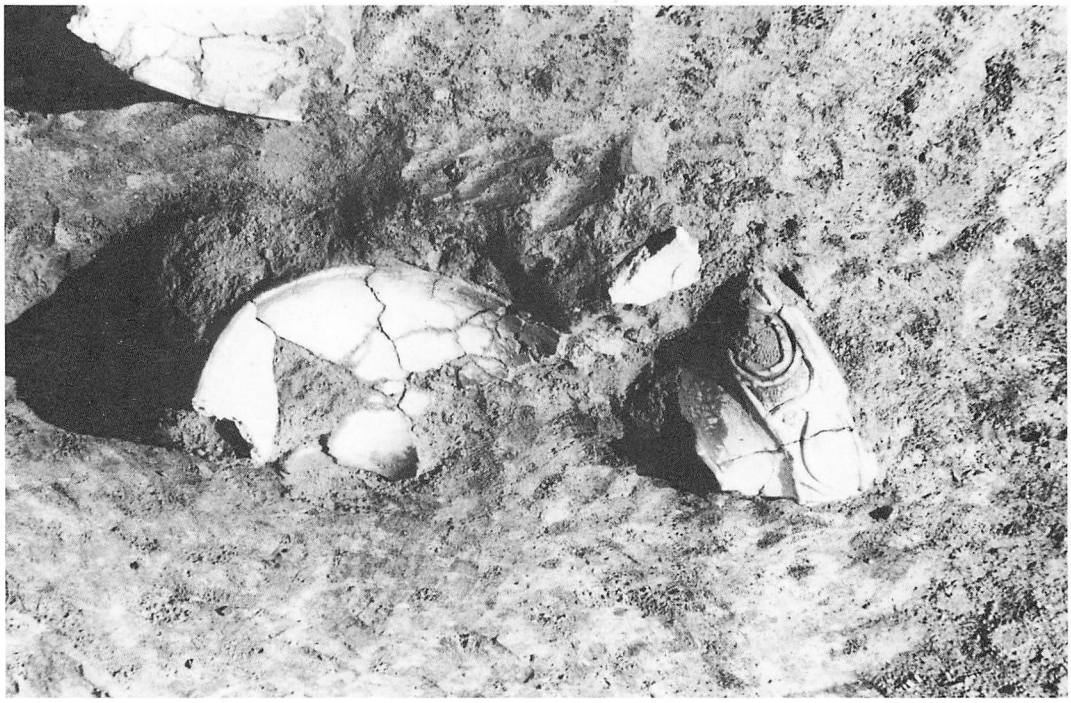
図版21　東台遺跡第４地点



(1)　３号住居址プラン

(2)　３号住居址発掘風景

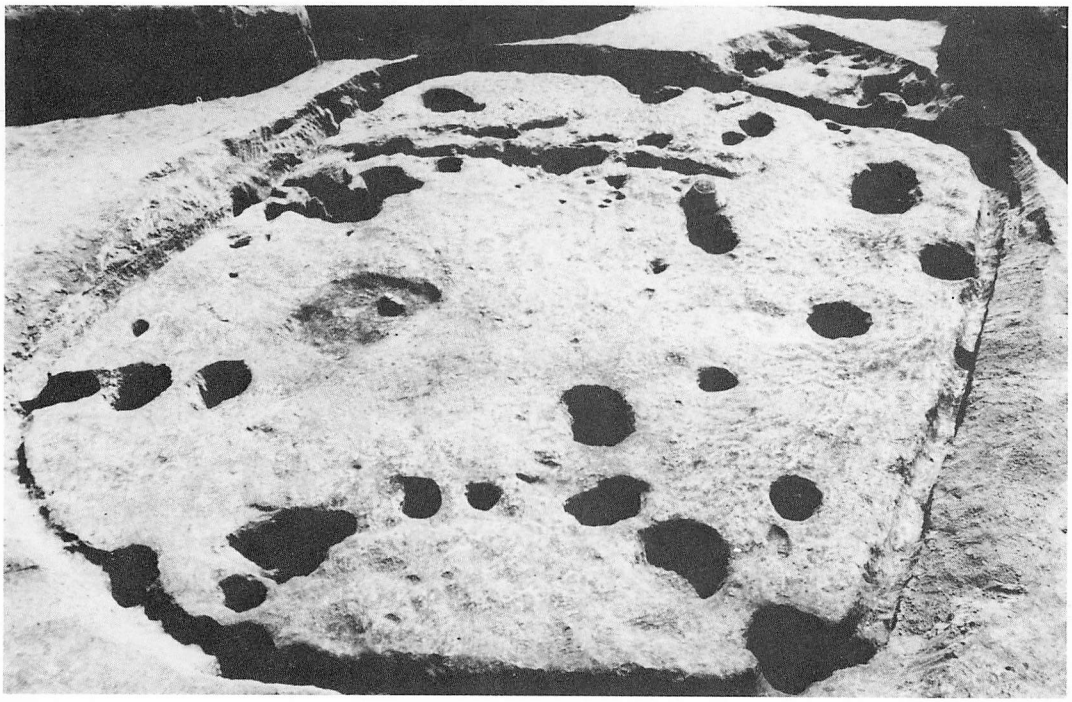
図版22　東台遺跡第４地点



(1)　３号住居址出土土器

(2)　３号住居址出土土器

図版23　東台遺跡第４地点



(1)　３号住居址

(2)　３号住居址

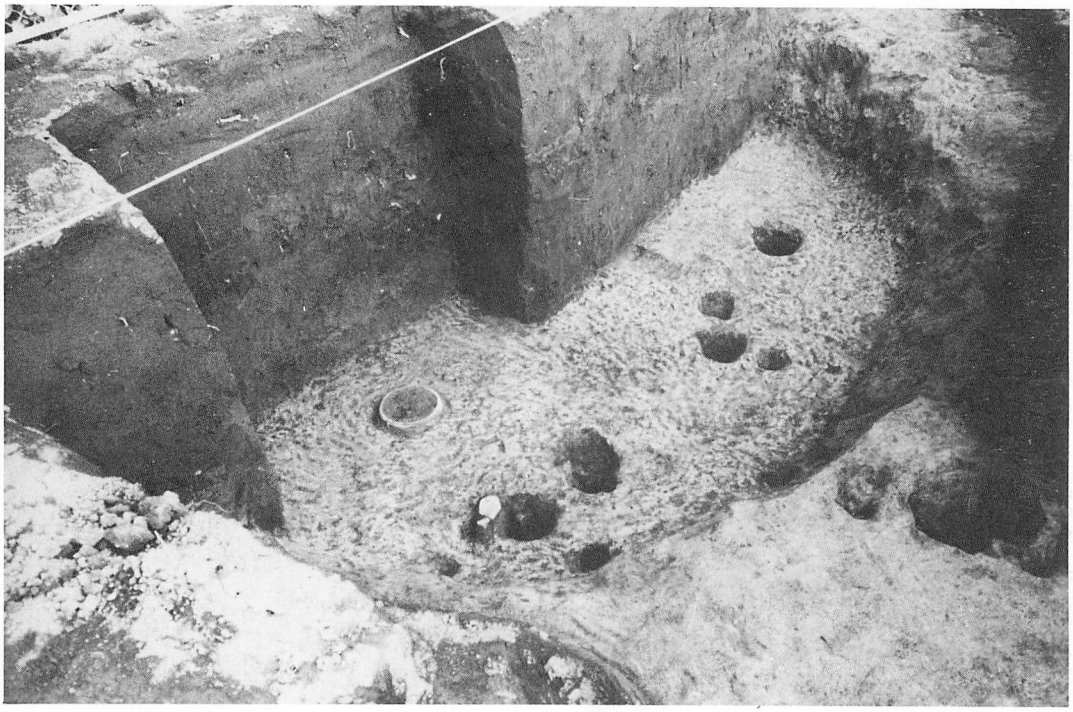
図版24　東台遺跡第４地点

(1)　４号住居址発掘風景

(2)　４号住居址炉体土器

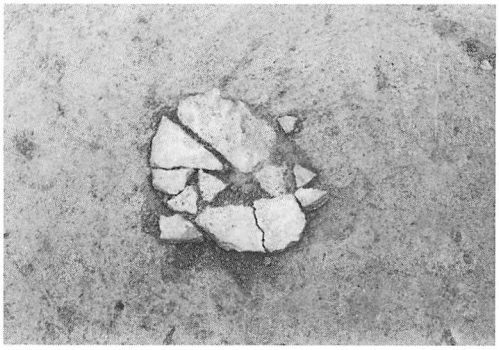
図版25　東台遺跡第４地点

(1)　４号住居址炉体土器出土状態

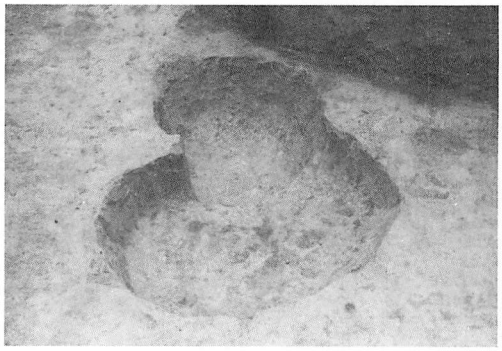


(2)　４号住居址

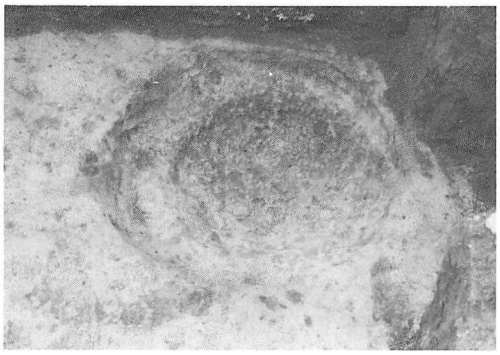
図版26　東台遺跡第４地点



(1)　１号土壙遺物出土状態

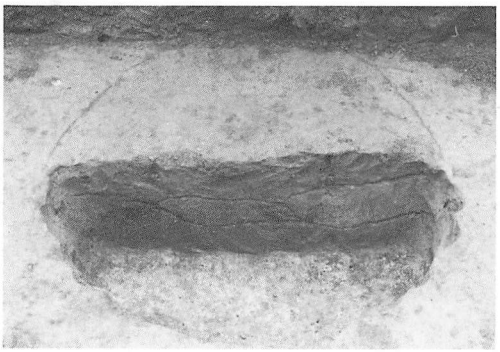


(2)　２号土壙



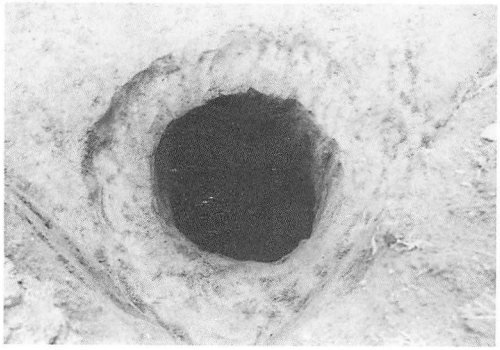
(3)　３号土壙

(4)　４号土壙

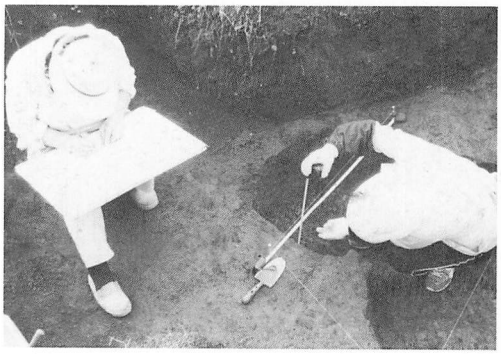


(5)　５号土壙（断面）

(6)　５号土壙



(7)　７号土壙

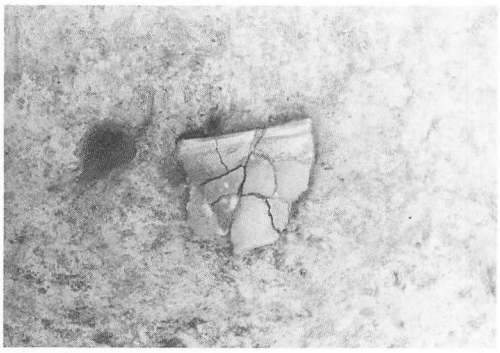


(8)　実測風景

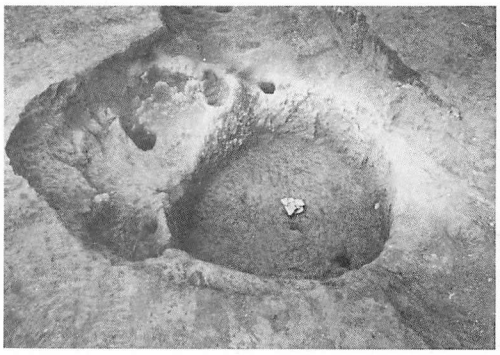
図版27　東台遺跡第4地点

(1)　8 号 土 壙

(2)　9 号 土 壙

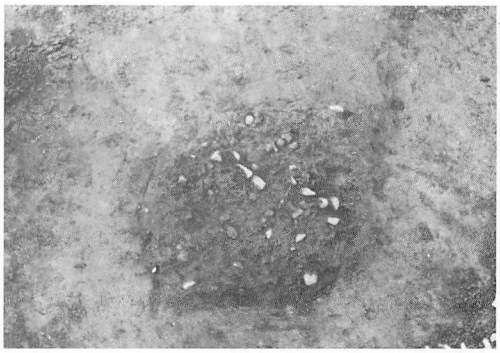


(3)　10号土壙出土土器



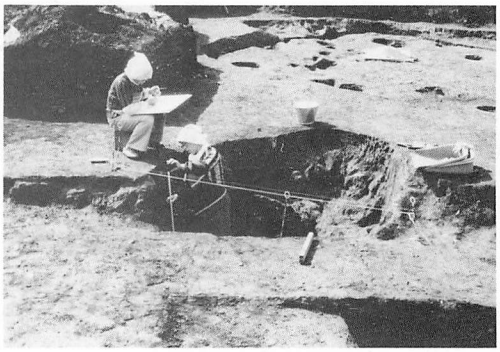
(4)　10 号 土 壙

(5)　1 号 集 石



(6)　3 号 集 石

(7)　4 号 集 石



(8)　実 測 風 景

図版28　東台遺跡第４地点

(1)　溝状遺構プラン（南から）

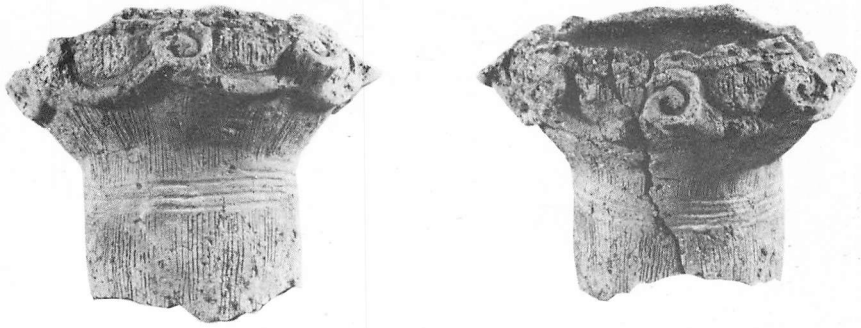
(2)　溝 状 遺 構

図版29　東台遺跡第４地点

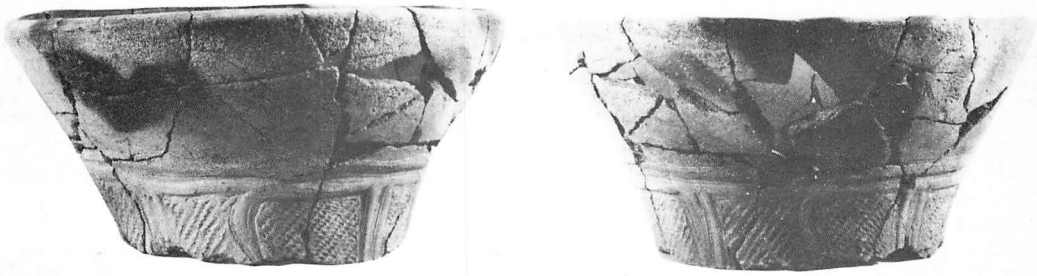
(1)　溝状遺構

(2)　発掘風景

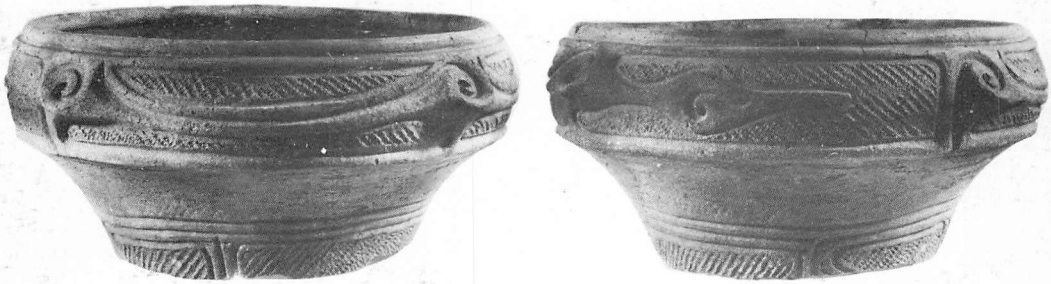
図版30　東台遺跡第４地点



1号住居址出土土器



3号住居址出土土器



4号住居址出土土器

出土土器

図版31　東台遺跡第４地点

(1) 整理作業

(2) 整理作業